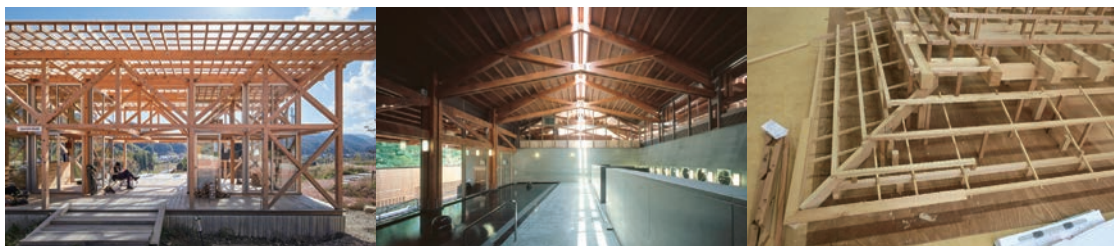


Bulletin



建築のその周辺 建築における木—モク—を考える

特集 建築のその周辺 I

大会 JIA 建築家大会 2025 千葉

ひろば 支部長挨拶

わたしの師

かながわ建築祭／湯の建築まちづくり

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

温故知新

交流委員会活動報告

学生の会 @joint 活動報告



細かなご要望にも応える ステンレス製オーダーキッチンを展開

タニコー株式会社は、1946(昭和21)年に建築板金、塗装業を営む谷口商店として東京都目黒区で創業しました。1964年に業務用厨房機器の製造・販売を行うメーカーに業態転換し、2000年には商号をタニコー株式会社に変更。2008年からは、業務用キッチンで培ったステンレス商品の開発や加工技術をもとに、家庭用高級システムキッチンを開拓はじめ、2019年にはオーダーメイドキッチンの新ブランド「MEISDEL」をスタート。デザイン性と機能性を兼ね備えたオーダーキッチンとして展開しています。家庭用・業務用キッチン「MEISDEL」について、谷口秀一社長にうかがいました。

自社で設計・製造する技術を磨く

創業当時は建築業を営んでいましたが、1964年に厨房機器メーカーに転換。当時は厨房のつくり方も分からず、設計も製作もすべて手探りで始めました。ですから、当社の商品は発想も製造方法も他社にないオリジナルのものが多く、ステンレス加工も含めて自社工場で行っているのが特徴です。ものづくりに対する精神は今も受け継がれ、社員は独自性が強く、自ら考えて生み出すものづくりを続けています。

デザイン性の高い

家庭用システムキッチンに挑戦

タニコーというと業務用キッチンのイメージが強いかもかもしれませんが、2008年から家庭用高級システムキッチンも販売しています。家庭用キッチンの市場は大メーカーが占めていましたが、当社は500万円から1000万円を超える高価格帯の商品を展開。高価格帯の商品を購入されるお客様は要求も高いため、それに応えながら社内のデザイナーを育成してきました。

デザイン性の高い商品を扱うもうひとつのきっかけが、ブラックステンレスとの出会いです。ブラックステンレスは塗装や着色ではなく素材そのものが黒いため、色が変色することがなく、ステンレスの質感を活かした表面加工が可能です。加工自体は難しかったため、あまり用いられてきませんでした。家庭用キッチンを通して加工方法などの技術開発に努めました。



ブラックステンレス仕様のキッチン



古民家を改修したレストランyosemite様(仙台)のオープンキッチン

イメージをかたちにする 魅せるキッチン「MEISDEL」

2019年にはオーダーキッチンの新ブランド「MEISDEL」をスタート。ステンレスの加工技術を習得し、デザイナーも習熟してきたため、そのノウハウを業務用として新たに展開しました。

インバウンド向けの高級ホテルやレストランの計画が増え、そこでよく採用されるのがオープンキッチンです。当社のキッチンは、スタイリッシュであることをアピールするのではなく、シェフがかっこよく見える“魅せるキッチン”をコンセプトに掲げ、「ここで調理したい」「こういう場所でお店を成功させたい」とイメージしてもらえそうなキッチンを目指しました。フルオーダーなので、お客様のご要望にもひとつひとつ応え、リピーターも

増えています。

ステンレス商品を開発しながら成長してきた当社。オーダーキッチンでも素材の品質はもちろん、天板には一般に使用されるものよりも厚い、業務用の1.5ミリ厚の板を使い、ご要望があればさらに厚い板を使うこともできます。厚くなるほど加工が難しくなるのですが、角をシャープに見せるために裏側からVカットを入れたり、排水と一体にするなど、細かなご要望にもお応えできます。

今年からは、家庭用と業務用の垣根を越えてデザイン性・機能性を追求する「ラグジュアリーキッチン」を展開してまいります。7月には「MEISDEL」のショールームが南青山に新たにオープンします。ぜひ直接商品に触れ、イメージを広げていただけたら嬉しいです。

tanico タニコー株式会社

<https://www.tanico.co.jp>

ステンレス総合加工メーカーとして、業務用厨房機器および関連機器各種、オーダーキッチンの製造、販売、設計、施工を行う。

〈本社〉東京都品川区戸越1-7-20 タニコー戸越ビル TEL: 03-5498-7111 FAX: 03-5498-7927

札幌、仙台、高崎、東京、川崎、名古屋、大阪、神戸、広島、福岡など、約90カ所に営業所を展開。

■ MEISDEL 南青山ショールーム 東京都港区南青山1-15-41 VORT 南青山 II 1階 7月3日オープン!

目次

●特集

4 建築のその周辺

建築における木—モク—を考える

- 4 飛騨から昇る百姓力の狼煙 澤秀俊設計環境／SAWADEE 澤 秀俊
 6 秋川溪谷 瀬音の湯 —循環と再生を象徴する「森の中の建築」をめざして— 佐藤総合計画 八木真爾、多々良邦弘
 7 伝統と工学 北茂紀建築構造事務所 北 茂紀

●大会

8 JIA 建築家大会 2025 千葉 各分会からのメッセージ／企画紹介／千葉地域会関連の企画紹介

●ひろば

- 14 支部長挨拶 4年目を迎えて 大宇根建築設計事務所 渡邊太海
 15 わたしの師 対極的な二人の師 金箱構造設計事務所 金箱温春
 16 支部活動紹介 第36回 JIA 神奈川建築 WEEK かながわ建築祭 2025
 コンテンポラリーズ 柳澤 潤／Field Design Architects 井上雅宏／伊藤立平建築設計事務所 伊藤立平／
 八板建築設計事務所 八板晋太郎／濱田慎太建築事務所 濱田慎太／仲亀清進建築事務所 仲亀清進／
 洋建築企画 清水智津子／アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所 田井幹夫
 20 建築まちづくり委員会 湯の建築まちづくり —住民参加の別府まち歩きワークショップ—
 日本建築まちづくり適正支援機構 連 健夫／AMBIENCE ARCHITECTS 一級建築士事務所 松村哲志
 22 覗いてみました他人の流儀 須藤玲子氏に聞く 伝えたいことを布で表現する Bulletin 編集 WG
 24 海外レポート アブダビ日本人学校に勤務して アブダビ日本人学校 滝澤富明
 26 温故知新 先達に学ぶ 建築家の生業 南條設計室 南條洋雄
 27 抱負を語る 求められるものは何か 宮本忠長建築設計事務所 宮本夏樹
 抱負を語る 「人」と「まち」とのかかわり 東急設計コンサルタント 伊藤浩史
 28 活動報告 交流委員会 C・D グループ 合同建物見学会 —奄美大島&喜界島— オイレス ECO 酒巻芙蓉
 29 交流委員会 G グループ なぜ今 BIM や DX が必要なのか —BIM と建築の未来を考える—
 グラフィソフトジャパン 中村 駿
 30 学生の会 @joint 活動報告
 建築への視野を広げる学び チョタウーテ石膏ボード工場見学記 日本大学大学院 伊藤綾香
 SDGs とは、建築家とは 学生の会 @joint 主催、第2回「相席スタジオ」 早稲田大学大学院 辻本雄一郎

●あとがき

- 31 広報からのお知らせ 『Bulletin』編集長退任挨拶・新任挨拶／支部総務委員会からのお知らせ／編集後記
 2 パートナーズアイ タニコー株式会社 細かなご要望にも応えるステンレス製オーダーキッチンを展開

表紙写真：(上段) 左：『日本橋こいのぼりなう！』展示風景 2025年(写真 Nacasa & Partners)、中：第2回「相席スタジオ」、右：かながわ建築祭(写真 TERAOKAWA 写真事務所)、(下段) 左：「THE SESERAGI CAMP」設計 澤秀俊設計環境／SAWADEE(写真 楠瀬友将)、中：「秋川溪谷 瀬音の湯」設計 佐藤総合計画(写真 鈴木研一写真事務所)、右：珠明寺本堂の検討のための縮小模型(アイチケン作)

建築における木—モク—を考える

飛騨から昇る百姓力の狼煙

建築における木造を真剣に考えるには、まずはその材料である木材について考えることが不可欠である。三次産業である建築設計に留まらず、二次産業の製作や一次産業の林業の世界まで立ち戻って木の在り方・使い方を思考するなど、職能を拡張し続ける異端の建築家に、建築における木材利用の多様な可能性を聞いた。(編集長)

澤秀俊設計環境
/ SAWADEE
澤 秀俊



末端に表出する現代社会の膿

東京、ベルリン、パリなどの大都市、経済成長真っ只中のベトナムでの設計活動を経て、飛騨高山の里山に拠点を構え7年が経った。舞い込んでくる仕事の相談はそれぞれ多種多様であるが、振り返ると半数以上が改修案件である。それらは住宅のみならず、旅館、事務所、倉庫などであることも多い。先代、先々代が高度成長期に建てたそれらが老朽化し、更新が必要で余っているのどうにか活用できないかというのがほとんどである。超高齢化・人口減少の波は、都市に企業戦士を輩出し続けてきた末端の地方に真っ先に押し寄せる。増え続ける空き家、それに伴う生活インフラの弱体化や荒廃した山林の問題など、課題は枚挙にいとまがない。それら厳しい現実を受け止め、地方都市で豊かに生きるために建築に何ができるのかを日々意識的に自問している。

自然エネルギー活用の実践と建築への応用

グローバル社会に生きる私たちの生活は、世界のどこかで起きる戦争や経済危機などに起因する石油や資材価格の上昇といった外的要因に常に振り回されている。しかしながら本来、日本の国土は森と豊富な水など資源に恵まれた国であり、それを活かさないという選択肢はない。私が拠点としている岐阜県高山市では、面積の92%が森林であるにもかかわらず、一冬に市民が灯油に費やす金額は24億円にも上るといふ。たかだか人口8万人の地方都市でそれだけの化石燃料が使用され、その分のお金が原油産出国へ流れているのだから、日本全体で言えば気も遠くなるような膨大な金額であろう。身近にある資源をエネルギーとして利用することは急務だと言える。

地元有志で設立した自然エネルギー NPO に、立ち上げ時から昨年まで10年間事務局として参画していた(現在、新たに自給率を上げるためのコミュニティの立ち上げ準備中)。放ったらかしの山林を皆で間伐し、採れた

原木をチップ・薪炭等の木質燃料から、葉はアロマオイルへという具合に、1本の木を余すことなく活用する。その延長上で、5年前から自分たちで建材をつくり、設計案件へ応用している。間伐材の価値を上げ、里山保全活動に弾みを付けるためだ。山で採れた原木を車で6分ほどにある製材所まで運搬し、挽いてもらった材を自社で管理する木材乾燥場(写真1)にて棧積みし乾燥させる。半年〜数年かけて乾かした材は、必要に応じて人工乾燥機のある業者へ、フローリングなどの実加工が必要な時は近所の木工所へ、という形で半径5km圏内で建材をつくれるよう、森林資源の川上〜川下までの林材産業ネットワークを構築している。

飛騨高山の中心部から車で20分ほどの山間地に2年前にオープンしたキャンプ場「THE SESERAGI CAMP」(写真2)では、構造材を自給することを試みた。山の現場で搬出が最も容易な2m材を多用するトラス構造で架構をつくり、山仕事の都合を建築の空間構成へと反映させた。



写真1 木材乾燥場



写真2 「THE SESERAGI CAMP」

「スマイル国府薬局」(写真3)では、松杭による地盤改良(写真4)や、伝統構法である板倉造りを発展させる形で木材を上から落とし込み、耐力壁・断熱壁として兼ねることができた純度の高い木質空間を試行した(写真5)。これらの構法を用いることで、山からの搬出の難易度が高い4m以上の長い材や、集成材に頼ることなく(飛騨地方



には集成材工場がない)、さまざまな規模の建築へ展開できると考えている。

写真3 「スマイル国府薬局」



写真4 松杭による地盤改良



写真5 木材を上から落とし込む

今、地方都市の空き家に建築家に何ができるか

冒頭で触れたように、全国的に空き家の数は増え続けており、最新の調査で過去最高の約900万戸超となったという(総務省2023年住宅・土地統計調査)。一方、新築の着工数は年間約80万戸(2023年度)であり、数字の話だけでいえば、向こう10年間新築を建てずその分空き家を活用したとしてもまだ余りが出るほどの膨大な数である。人口が多く地価の高い都市部では、空き家は投資対象となり、アパートやマンションなどの集合住宅やオフィスに置き換わりやすいが、他方、人口減少や過疎化の波が押し寄せる地方では投資し甲斐がないため、空き家は年々増加の一途を辿る傾向である。私の活動拠点の飛騨地方でも、言わずもがな状況は同様で増え続ける空き家が問題となっている。戦後の高度経済成長期に建てられたさまざまな用途の建物が空き物件になり、そのほとんどが何かしらの修繕が必要で、改修や建替え、更地化の選択を迫られている。

2023年に竣工した住宅「神田町の6ユニット」(写真6)では、既存家屋に対しキッチン、水回りといった機能をもつ6つのスペースユニットを挿入することで、構造と断熱の補強を施し、快適な住環境を獲得することを試みた。「土蔵と補う増築」(写真7)では、飛騨高山の伝統保存地区に建つ築約150年の土蔵に対し、太陽を捕まえるような細長い塔状の増築をすることで、土蔵に不足している光と風を補い住空間として成立させた。



写真6 「神田町の6ユニット」



写真7 「土蔵と補う増築」

百姓に学ぶクリエイティブな生き方

こういう環境で毎日仕事をしていると、人間に本当に必要な能力は“百姓力”ではないかと思うようになった。身の回りの資源を上手く活用し、自分たちの暮らしを快適に整える力・甲斐性のことである。有事の際、最も求められるのが高い“百姓力”であり、それ故これからの日本は地方から輝く時代に突入していると感じる。最近

は地方への移住者が急増中と聞くと、その時地方は諦めて移る場所ではない。自然と近く、食料も豊富で伝統文化が根付いた地方こそ、クリエイティブで地に足の着いた魅力的な場所であることは世界の希望の狼煙なのだ。

地域資源を用いて建築をつくる喜び

間伐材の活用だけでなく、身の回りにある素材を工夫して新たな価値を生み出せないかいつも考えている。「スマイルテックのオフィス」(写真8)で試みたのは、写真8「スマイルテックのオフィス」



写真8 「スマイルテックのオフィス」

笹を断熱材に活用することであった。生命力の強い笹は、伐採後の山を覆い尽くすとその他の広葉樹の稚樹が育たず、単一種目の笹山となってしまう。林道整備も笹刈りから始めなければならないことも多く、笹は山仕事の厄介者と言われている。そこで笹に価値を生むために、乾燥・粉碎しチップ状にしたものを断熱材として活用した。分析したところ、グラスウールと同等の断熱性能が認められ、昨冬も問題なく過ごせたということだった。

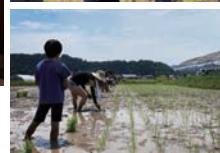
「ヒダカラのオフィス」(写真9)は、地元ベンチャー企業のためのオフィス改修計画であるが、飛騨の伝統建築の樽葺屋根で使用されていた栗の樽板を立体的に張ったり、焼杉材を社員の皆さんとワークショップ形式で焼いて製作した(写真10)。その他、地産広葉樹の樹皮でルーバーを製作したり、稲を干すための稲架丸太(刈り取った稲を機械で乾燥させることが多い昨今では、稲架丸太は活用されずに農家に眠っていることが多い)を外装材として使用するなど、可能な限り地域資源を用いて建材を作り現場へ供給した。その延長上で木材を運搬するために小型移動式クレーン免許を取得したり、事務所総出で稲作を開始したり(写真11)と、新しいことに常に挑戦している。そのたびに笑い話のような失敗や苦労は絶えないが、地域資源や伝統工法を参照し、仲間を巻き込みながら創作を展開していくことは、すでに限界に達している資本主義的生き方を打開するための一筋の光のように思える。それを実践する地道な日々の中に建築の新たな可能性があると感じている。



写真9 (上) 「ヒダカラのオフィス」

写真10 (右上) 焼杉材の製作

写真11 (右下) 事務所総出の稲作



秋川溪谷 瀬音の湯

—循環と再生を象徴する「森の中の建築」をめざして—

地域に根差した木造の公共建築の実例として、東京の森に佇む木造温泉施設の設計者に、木造建築により地域を活性化しようとする行政の想いと、地場産材を用いて大規模木造建築をダイナミックに構築する組織事務所ならではの発想を聞いた。(編集長)



佐藤総合計画
八木真爾



佐藤総合計画
多々良邦弘

森に理想を描く

「エコミュージアムをつくりたい」、それがあきる野市が思い描いていた理想でした。エコロジーとは循環することである、という考えのもと、癒しと学びの体験の場をつくり出し、地域を活性化しようとするものです。

場所は秋川溪谷の中にあり、自然体験を求めて、都心から多くの観光客やハイカーが訪れます。この立地のポテンシャルを生かした戦略的な施設が構想されました。

温泉を掘削し、カフェ・レストラン、地域物産ショップ、宿泊といった機能を複合させ、なおかつ、森の資源をフル活用した集客施設とすることで、地域経済への好循環も促そうとするものです。



秋川溪谷に沿うように建つ



森に溶け込む佇まい

撮影：鈴木研一写真事務所

森の循環を大切に

森を育てること、つまり森の生命力を蘇らせることが考えの根幹です。それは、山の保水力を取り戻し、川への水量を抑え、水質もよくする、という自然の循環の視点に立つことを意味します。さらに、森を育てることは、地域にとっても重要なことで、林業の活性化にもつながります。このように、地域と生態の循環の系の中心にこの施設を据えることがコンセプトとされました。

森との親和性を高める

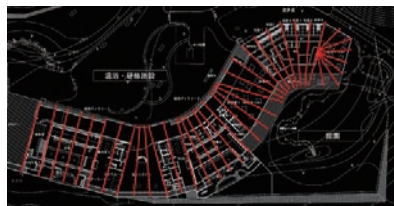
このプロジェクトの木材利用で特筆すべきは、単なる地場産材使用ではないということです。製材は都内で唯一製材組合がある地元、あきる野市で行われました。そして、製材で出る残材も温泉水の昇温ボイラーの燃料に利用するという循環の視点が明確にされました。

さらに、この施設ができることによって、敷地内のラ

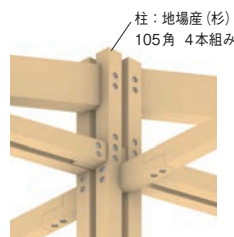
ンドスケープはもちろんのこと、周辺の森の木々の全てを地元の在来種に戻すことまでを視野に入れた壮大な視点がありました。そこで、森と建物との最良な関係をつくり出すかたちを模索しました。建物を蛇行させ、アプローチから建物周囲に至るまで、森を抱き、森に寄り添うような、森と一体となった佇まいをつくり出しました。一方、内部でも、諸室など機能は分散させ、軒を低く抑えることで、森への多様な風景を取り込み、森林環境そのものを楽しむことができるような施設づくりを行いました。森の循環と再生への視点を重視することによってこの施設が成立しているのです。

循環と再生を象徴する森の中の建築をめざして

循環の意図に沿うように、架構は一般流通材の105角の製材を4本一組で隙間を持たせた組み柱として、小屋組みや梁を差し込みました。木の密着性を生かした一体架構を基本ユニットとして、平面的には秋川に沿って蛇行させ、断面的には敷地のレベル差に追従させ、木々を間を縫っていくような、森の中にそっと置かれたような佇まいの建物としました。



木の架構が角度を振って連なる構成



組柱廻りの詳細



温浴施設の内部にも架構を現す
撮影：鈴木研一写真事務所

回遊性を生み出す森の中の建築

溪谷には歩行者用の橋も架かり、森を抜けると建物が静かに現れるというシークエンスも生まれ、周辺との回遊性も高まりました。循環と再生を重視した施設づくりは共感を得て、公共施設としては驚異的な集客力を誇り、竣工から18年が経過した現在も、木と地域の魅力を発信し続けています。

伝統と工学

我が国の木造建築文化のルーツはやはり伝統木質構法にある。古都を擁する関西と比べて少ないが、関東で伝統木質構法に積極的に取り組まれている構造家に、構造設計者として伝統木質構法に携わる中で、生の木組みに向き合う意義や面白さを聞いた。(編集長)

北茂紀建築構造事務所
北 茂紀



当社は構造設計事務所として、文化財建物—とりわけ伝統木造建物—の耐震診断と補強設計を主な業務としている。新築における構造設計では「構造設計→施工→建物」という流れが成立するのに対し、文化財ではすでに存在する建物を「建物→調査→構造設計」へと翻訳する逆の流れとなる。この時、伝統木造では全てが工学的に明らかにされているわけではないため、いかに既存建物を構造モデルに落とし込むかに頭を悩ませることになる。また現行基準に照らすと、性能が不足していると判断される伝統木造建物も多い。ただしそれは過去の技術が劣っていたわけではなく、単に求めていたものが違うだけである。当時の社会的、技術的、経済的制約の中で最善が尽くされた建物の性能を解き明かし、現在求められている性能を満たす方法を考えることが、この仕事の面白さである。

数多くの伝統木造と向き合ううち、その根幹は「手刻み」と「木組み」にあると考えるようになった。現地調査で小屋裏や床下に潜り込み、百年近くもの間に積もった埃にまみれながら遭遇する架構は、不揃いの材が熟練の手で刻まれ、巧みに組み上げられていて感動的である。大工の技術は小屋裏や床下などの見え隠れでこそ現れるものだと考えており、一般には公開されることがない空間を体験することができるのもこの仕事の特権だろう。

こうした経験は新築にも生かされる。神奈川県南足柄市・珠明寺本堂の建て替え(設計：正田建築、施工：(株)

アイチケン)では、手刻み木組みを前提に、限界耐力計算を用いて構造計算を行った。仕口の一つ一つが耐力要素となるため、意匠・構造・施工の三者の意見を擦り合わせ、妥当な形状を見出していった。「耐力を確保するためにはこのほぞは通したい」「組み立て手順を考えると、ここは雇いにせざるを得ない」などと、夕暮れの旧本堂に集い、蚊を払いながら膝を突き合わせて議論を重ねたことが思い出深い。手刻み木組みに絶対のルールはなく、我々自身で生み出していくべきものだ実感することができた貴重な経験であった。

1927年、田辺平学氏は『神戸新聞』に「大工の手からのみ鑿を奪え」と寄稿した。北丹地震の惨状を見て耐震性確保を促す意図だったのだろうが、あまりに乱暴な提言である。その言葉からほぼ一世紀を経た今日、プレカットの普及によって実際に多くの大工が鑿を手放しつつある。プレカットの合理性や生産性を否定するつもりは毛頭ない。しかし各現場に1割ずつでも手刻みの余地がなければ、日本が誇る卓越した大工技術は次代へ継承されない。先日能登で出会った大工が、「被災した建物を壊すという奴は大工じゃない。直すという奴が大工だ」と言っていた。日本にはやはり大工が必要である。

幸い近年は木造架構が工学的に進展し、手刻みの仕口の性能評価なども可能となっている。私は今後の木造の構造設計においては、伝統技術と工学を融合させ、「大工に鑿を返す」設計を実現することに関心を持っている。



珠明寺本堂：検討のための縮小模型(アイチケン作)



珠明寺本堂：建物の架構

「せんのちから」

多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

「JIA 建築家大会2025千葉」は、多様性をテーマに、個性溢れるトークセッションを2日間にわたり各会場にて展開します。市民や学生にも開かれた新しい大会のあり方を、関東甲信越支部として全国に発信する試みとなります。今後の大会の持続性や自立性に弾みをつけるため、JIA会員の1,000人以上の登録をめざして広報活動をしています。今号では、大会の運営を進める各支部からのメッセージと企画の一部を紹介します。

自律的であり連関する建築家の多様な活動

今村創平 企画部会長

建築家の役割は多様化し、建築と社会の関係にもさまざまな形態があります。無数の課題があり、一方でそれらは建築という領域の中で、緩やかに繋がっています。予定されている20あまりのセッションでは、100を超える登壇者が知見を披露・交換し、固有のトピックが深掘りされます。同時に大会参加者の方々は、複数のセッションに横断的に参加することで、それらがお互いに連関していることに気づくでしょう。環境、教育、地域、保存、教育、AI、国際、職能、さまざまな事柄のアクターが連関しあう、〈自律分散型ネットワーク〉のプラットフォームに、JIAは、JIA全国大会はなり得るか、そうしたことを問う試みです。JIAでは、「建築家とは？」という問いかけがこれまでも繰り返されてきましたが、理想的とされるひとつの建築家像がある時期はとうに過ぎました。建築家、市民、研究者、行政などさまざまなひとが、性別、所属、世代、人種を超えて交ざり合うこの機会に、JIA会員の皆さんの参加は欠かせません。

「多様性」を直観的に伝える広報をめざして

会田友朗 広報部会長

多様な登壇者によるトークセッションをはじめとする、多彩な企画の広報に知恵を絞っています。目玉の1つは、全部会と緊密に連携しながら、充実化を図っている大会参加者へ配布予定のパンフレットです。当日のガイドブックであり、楽しい読み物であり、活動の多様性を示す保存版の記録となることも意図しています。一部のセッションからは原稿をいただき、今号の『Bulletin』でも紹介させていただいています(pp.12-13)。また、ウェブサイト、SNS等、会員だけでなく市民の方々に多く参加いただける大会にするべく広報戦略を練っています。グラフィックは「せんのちから」をヒントに、千葉の地域性や、多様性というテーマをJIA公式ロゴをモチーフに展開する案を、若手デザイナーに提案していただきました。一例としてチラシを今回掲載しています(pp.9-10)。

大会広報には支部のみなさまの協力も不可欠です。大会に参加いただくことはもちろん、ぜひ広報へもお力添えをお願いいたします。

ひとり一人の「ちから」が集う場をめざして

大山早嗣 運営部会長

本大会は関東甲信越支部所属の会員をはじめ、全国の会員ならびに関係者の協力をいただきながらつくり上げることを目指しています。2日間で20のセッション、各種展示を行う上で会場運営においては多くの協力が必要となります。大会運営に携わる会員も大会参加者であり、ひとり一人の負担を軽減することで、それぞれが参加したいセッションや各種企画に参加することが可能になり、大会が有意義なものになると考えています。

千葉県文化会館の大ホールを含む4つの会場でセッションは同時並行で行われますので、会場への誘導がポイントになります。誘導スタッフの配置はもちろんですが、参加者が直観的に理解できるサイン・案内を計画しています。

現在、大会に向けて千葉地域会のみなさんに多大な協力をいただきながら、さまざまな「おもてなし」の企画を練っています。2日間会場内の飲食エリアとレセプションパーティーの「食」については特に注目してください。

コンパクトで開かれた大会のために

鹿田健一郎 財務部会長

コンパクトで市民に開かれた持続可能な大会を目指して準備が進んでいます。財務部会では支出を抑えながらも充実した大会になるよう、各支部と連携し調整を続けています。

大会は会員の皆さまの登録料と大会趣旨にご賛同いただいた個人、企業様からの協賛金によって支えられています。すでに協賛をいただきました皆さまにはこの場を借りて御礼申し上げます。市民の方々に建築家を理解してもらうには、まずは建築を身近に感じてもらうことが必要です。財務部会では交流委員会と法人協力会員の方々の協力を得て、市民にも分かりやすい企業展示コーナーを計画中です。協力会員の皆さまの扱う製品や技術は、建築の重要な構成要素でありながら実は生活のとても身近にあるものです。展示を通して建築は多様な要素の集積によって生まれていることを再認識していただき、市民社会と建築家の距離が縮まることを期待しています。大会の成功には会員の皆さまのお力が必要です。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

JIA Convention Chiba 25

JIA建築家大会 2025 千葉

せんのちから

2025年11月7日[金] 10:30-17:30 (開場 10:00)

2025年11月8日[土] 10:00-17:30 (開場 9:30)

メイン会場. 千葉県文化会館

※11/7開催の一部の企画のみ「千葉大学あのはな同窓会館」が会場になります。

一般参加. 無料、事前登録は不要です

JIA会員: 別途定める登録費(事前登録制)が必要です。(8月登録開始予定)

主催. 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

運営. 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 大会実行委員会

Web. <https://jia-convention.net/2025chiba/> [JIA建築家大会2025千葉公式ウェブサイト]

未来の建築・まちづくりを
市民や学生のみなさんと考える
20のトークセッション



大塚谷津田

大会

JIA建築家大会 2025 千葉

せんのちから

多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

The Expertise of 1000

Respecting Diversity and Creating Connections:
Society and Architecture



JIA建築家大会2025千葉
公式ウェブサイト

JIA Convention 2025 Chiba

開催趣旨

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA) は、2025年11月7日(金)、8日(土)の2日間、千葉県文化会館と千葉大学ゐのはな同窓会館を会場に「JIA建築家大会2025千葉」を開催します。今年の大会テーマは「せんのちから」です。

今、私たちの身のまわりにはさまざまな問題が溢れています。〈持続性をもつ好ましい社会〉を実現するためには、幅広い分野にわたる多様な知見や職能、技術の融合が欠かせません。私たちは、これらの課題解決に取り組んでいる建築家、技術者、行政、運営者、市民、学生など計100名以上に登壇していただき、これからの建築や地域について共に考える、1,000人会議を企画しました。20を超えるトークセッションを通して、多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について考えます。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

トークセッションの予定(一部)

2025年6月時点のトークセッションの予定です。
今後、内容が変更になる場合があります。最新情報は公式HPでご確認ください。

地域の個性を活かす Locality

- 千葉のまちの真ん中をデザインする～開府900年から1000年へ向けた持続可能な賑わいづくりと人づくり～

地域社会・地域産業との繋がり Community

- 都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来～農とまちを繋ぐコミュニティから考える～

未来社会に向けた新たな取り組み Innovation

- 事前防災への取組と今後の展望

次世代を担う建築家たち Education

- 社会に発信する建築家のメディア実践を考える

世界の建築家・日本の建築家 Architect

- 私にとっての「槇文彦」
- 「建築家」とは、どのような存在なのか
- International Presidents' Forum (IPF)
- 《越境建築家》たちとの対話
—「越境」が建築家にもたらすもの—
- 偉大な先輩建築家に学ぶX 大高正人——人と都市と建築



千葉県文化会館と千葉文化の森



千葉市北西部にある「タンジョウ農場」



もうひとつのナイロビ



以下に、予定されているセッションを紹介します。内容は現時点の暫定的なものです。各セッションの会場やスケジュールは決定次第、皆さまにお届けします。全国から集まる各支部の会員や一般参加の市民の方々をお迎えするため、ぜひ多くの支部会員の参加をお待ちしています。千葉大会を、どうか関東甲信越支部をあげて盛り上げてゆきましょう！（支部広報委員会）

企画紹介

*企画タイトルは現時点のものです。内容と併せて変更される可能性もあります。

企画タイトル	キーワード
地域の個性を活かす Locality	
歴史的意義ある建築の保存と誇るべき日本の景観 ～価値ある建物の保存・利活用を県民と考える＝県立図書館と大高建築～	建築文化と景観の啓蒙
DOCOMOMO Japan 25年 これまでとこれから	歴史、継承
千葉のまちの真ん中をデザインする ～開府900年から1000年へ向けた持続可能な賑わいづくりと人づくり～	建築家と地域の活性化
地域社会・地域産業との繋がり Community	
都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来 ～農とまちを繋ぐコミュニティから考える～	食と農
地域づくりへの新たなアプローチ	まちづくり
ケアと建築	福祉、地域交流
木材の非生産県における地域木材活用のための社会の仕組みづくり ～安定した木材生産にむけた千葉県の林業と建築家の連携～	環境、地域経済
未来社会に向けた新たな取り組み Innovation	
建築とテクノロジーの関係を問い直す ——若手建築家が見据える設計の未来流	技術革新
気候変動や社会変容を見据えた持続可能な社会基盤の未来像 ～建築・ランドスケープの新たな関係性を探る～	公共空間
土と水と建築・都市	環境、脱炭素
事前防災への取組と今後の展望	建築と社会、災害対策
次世代を担う建築家たち Education	
若手建築家（40歳以下）が考えるこれからの建築・まちづくり	若手建築家
建築学生が考える「これからの建築と社会」@千葉	学生、建築教育
建築教育の潮流と国際的なあり方	建築教育
第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「In-Between」から考える：建築をたがやし情報を育てる実践	情報、生成AI
社会に発信する建築家のメディア実践を考える	建築と社会、建築メディア
世界の建築家・日本の建築家 Architect	
私にとっての「槇文彦」	つながり
「建築家」とは、どのような存在なのか	資格制度
International Presidents' Forum (IPF)	国際関連
《越境建築家》たちとの対話 ——「越境」が建築家にもたらすもの——	国際関連
偉大な先輩建築家に学ぶX 大高正人——人と都市と建築	建築家
〈総括企画〉本大会の振り返りとこれからの建築家にあり方について	自律的連関

||お知らせ||

- 公式ウェブサイトを開設しました。 <https://jia-convention.net/2025chiba/>（7月下旬にプログラム詳細を掲載予定です）
- 上記サイトからリンクされる大会登録サイトは、8月初旬にオープン予定です。
- 本号と同日発刊の『jia magazine』437号（2025年8月号）でも大会関連記事を掲載しています。ぜひあわせてご覧ください。

歴史的意義ある建築の保存と誇るべき日本の景観

価値ある建物の保存・利活用を県民と考える
＝県立図書館と大高建築

[登壇予定者]

頼原澄子 千葉大学／DOCOMOMO Japan 副代表理事

高橋直子 伝統建築研究所

篠田智仁 建築主事／茂原市役所職員

森田敬介 森田建築設計事務所 他

[企画担当]

森田敬介(千葉地域会代表)、安達文宏(千葉地域会副代表)

近代以降の日本では、価値ある歴史的建造物や素晴らしいまち並みが所有者の一存で壊され失われてきました。民間の建築物所有者だけでなく、公共建築物の管理者である地域行政においても、行政の理屈の下である意味では自由に解体されています。そして今日では、物価の安さと安全さに起因したインバウンド需要に着目して、俄かに「観光立国」を標榜しはじめた日本。しかし、それは経済上の理由から生じたキーワードであり、建築やまち並みの歴史と価値を誇りとして、日本を護る真のムーブメントとは全く異質なものを感ずります。

日本の地方行政では、建物の歴史的価値や芸術的価値に全く関係なく、建物を管理する担当課の職員が、建物や歴史の価値についての知識もなく、評価も受けないままに、建物の築年数という視点だけで解体のリストが作成され、順次、解体が執行されます。この状況になって初めて地域住民や心ある建築専門家が知って、慌てて莫大な労力と費用と奉仕によって「保存運動」が行われますが、よほど幸運でなければ保存を勝ち取ることができません。世界でも有数の歴史を誇る日本ですから、行政担当者が今かかっているメンテナンス費削減という近視眼的な尺度だけで解体を決めるのではなく、二度と戻せないまち並みと建築物の歴史的価値や文化的価値、そして古い建物を解体して新築した場合のライフサイクルカーボン(炭素総使用量)の視点で本当に省エネか?の検討をして、累積コストについて専門家や学識者に確認し、その上で後世の県民市民にとってどうあるべきかを議会に諮るようであれば、国民意識のレベルが問われます。

「JIA建築家大会2025千葉」のメイン会場の県立文化会館は、聖賢堂と県立中央図書館の3作品併せて「千葉文化の森」と呼ばれる、建築家大高正人の代表格ですが、このうち聖賢堂は千葉県建築設計6団体の活動もむなしく昨年解体され、この世から姿を消しました。県立図書館もすでに解体リストに入っていると聴きます。こうした背景から、本セッションでは、大高建築の保存を例に、価値ある建物の保存活用を「県

民・市民も交えて」考え、公共建築物の管理の根本的なあり方を考え産み出すシンポジウムを創ります。(森田敬介)



解体工事前の聖賢堂

千葉のまちの真ん中をデザインする

開府900年から1000年へ向けた
持続可能な賑わいづくりと人づくり

[登壇予定者]

田中 章 そらのかけら店主／食楽ICHIBA代表

須藤雅之 Sudo-Bags 店主／ちこほこ実行委員会

田野 恵 子ども食堂「縁」／三希工房

明 里 千葉県の郷土史家

松浦健治郎 千葉大学

連 健夫 連健夫建築研究室 他

[企画担当] 柳田富士男(千葉地域会副代表)、寺川典秀(千葉地域会監査役)、飯沼竹一(千葉地域会)

千葉駅周辺、いわゆる「千葉都心」は、高度経済成長期からバブル経済期にかけて大きく発展しました。しかし近年では、郊外に大型ショッピングモールなどが増加したことにより、このエリアへの人の流入が減少し、大型商業ビルの相次ぐ撤退や個人商店の廃業が続いています。その結果、千葉都心の求心力の低下が大きな課題となっています。

このような状況を受け、千葉市は2016(平成28)年に「千葉駅周辺の活性化グランドデザイン」を策定し、まちのリニューアルを推進してきました。千葉駅周辺では大規模な再開発が進み、人通りは増加傾向にありますが、駅周辺以外のエリアには人が流れておらず、活性化には依然として課題が残され、街の空洞化、地盤沈下が進んでいる状況です。

そのため近年では、市民団体や関連企業などが歩行者天国や路上飲食パークといった実験的なイベントを開催し、人通りの回復を試みています。これまでに開催された主なイベントには、「ちば富士見屋台横丁」「千葉公園通り『ちこほこ』」「駅前大通りのパラソルギャラリー」「CHIBA SDGs Parklet Project」などがあります。しかし、こうした取り組みも、情報発信や認知度の面など課題があり、広がりや持続的な発展に繋がらないようで、歴史ある「親子三代夏祭り」や「中央区ふるさとまつり」などの祭典も含めて、一時的な人の集まりで終わっているように見えます。

このような背景のもと、「JIA建築家大会2025千葉」を契機として、過去のまちづくり活動の整理、現在行われている行政および市民レベルの取り組みの調査を行い、「市民・企業・行政・大学」が連携したまちづくりの企画、活動、ワークショップ(WS)を展開し、持続可能なまちづくりのビジョンを大会にて提案します。大会セッションでは、市民活動家や専門家、コーディネーターを招き、千葉都心の成立や事前のまち歩きWSの報告からはじめ、新たな視点やワクワクするような発想をもとに、活発な討議を行う予定です。なお、この活動は大会シンポジウムをゴールとせず、今後も千葉駅周辺のまちづくりに継続的に関わる協働チームの構築を目指すものです。

(飯沼竹一)



「CHIBA SDGs Parklet Project」
地元企業、千葉市、フードロスに取り組む出展者によるウォークアブル実験

現在、各セッション、企画を充実させるために調整中です。
変更があった場合はご了承ください。

都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来

農とまちを繋ぐコミュニティから考える

〔登壇予定者〕

山根正敬 恋する豚研究所
岩山雅子 タンジョウ農場
中村拓志 NAP 建築設計事務所
磯野智由 STYLELAB 他

〔企画担当〕

神成 健(千葉地域会)、竹中 修(千葉地域会)、磯野智由(千葉地域会)

多くの人が都市に居住して豊かな食文化を享受し消費する立場にあるのだが、現在我々の食を支え依存している生産者としての農業の実態については意外と知られていない。

道の駅などの直売所に並ぶ生産者名のある農作物から、合理化された大規模屋内生産施設より供給される野菜まで、その選択肢は幅広い。

千葉県はその温暖な気候、平坦な耕地の広がり、大消費地に近いという立地から実は農業生産量が多く(全国6位)、都市近くに多くの田園や農地が広がる農業県でもある。しかし、生産性の低さや天候に左右されやすいことに加え、他の産業と同様に高齢化に伴う後継者不足や都市の拡大に伴う廃業など、取り巻く課題も多い。

今回のセッションでは規模も向かうベクトルも異なるが、県内で特徴的な活動をしている3施設(サステナブルな環境をつくり出し、農業を見せ、体験することも意識した大規模な農場、地域の障がい者就労支援施設として雇用を積極的に進める酪農生産施設、小規模であるが都市近郊にて自然栽培の野菜を提供するキッチン)の活動を紹介する。その上で、農業関連施設の設計経験のある中村拓志氏の知見も加え、食の安全性や健康志向が重視される中での農業の重要性、さらに防災や耕地によるランドスケープ(棚田に代表される)の有効性、農とまちを繋ぐコミュニティをつくり出すために建築に期待されることなどを切り口として話し合うことで未来のまちづくりのヒントとしていきたい。(神成 健)



「タンジョウ農場」
農場で採れた野菜をいただくことができるレストラン「タンジョウファームキッチン」が人気



農・食・アートが融合した「KURKKU FIELDS(クルックフィールズ)」



生産者直営レストラン「恋する豚研究所」

木材の非生産県における地域木材活用のための社会の仕組みづくり

安定した木材生産にむけた千葉県の林業と建築家の連携

〔登壇予定者〕

千葉県森林課職員(行政)
千葉県森林組合員(森林保全/伐り出し)
木材製材関係者(製材所(跡継予定者))
山主(森林所有者)

森田敬介 森田建築設計事務所

鈴木 晋 アルキテク設計室

〔企画担当〕鈴木 晋(千葉地域会)

国は木材の利用促進として、国産木材生産量を増やす施策を進めています。これは林業が盛んな「木材生産県」としては地域木材活用の促進にもつながりますが、全国全ての地域で地域木材の利用を増やすことに有効なしつらえではありません。そして、千葉県のように、木材の利用は全国上位ですが、生産量や森林・人工林の面積が少ない県は、「消費県」として木材利用を期待されます。このように国産材の利用促進策が、生産県と消費県の2つの属性で捉えられていることを知らない方も多いかもしれません。地域環境のためには、全国の建築家が、それぞれの地域木材を利用しやすい仕組みを持つことは有効であり、その方法の検証や研究を進めていくことが大切だと考えます。

そこで私たちは、木材生産量が多い「木材生産県」に対し、生産量が少なく、すぐに生産量を増やせない県を「木材非生産県」と定義し、生産量が少なくても安定して地域木材が活用できる仕組みづくりを考えることにしました。活動のきっかけは、2019年の台風で受けた森林被害でした。これを機に千葉地域会は、林業関係者と共に県産木材利用の研究・シンポジウムを続けています。さらに2023(令和5)年11月には、千葉県と地域木材利用促進協定(2者協定)を締結しました。

以上をふまえ、このセッションでは、千葉県森林課に参加協力いただき、また「山主」「森林組合」「製材所」「林業後継者」など県内で林業に関わるさまざまな方にも参加してもらい、地域木材活用の実態・問題点・今後の在り方の認識について、会場の皆さんも含めて互いの理解を深めていきたいと思えます。そして私たち千葉の建築家と一緒に、県産木材の活用促進のための共通の夢を見つけたいと考えています。これを千葉県の地域性を生かした木材利用の仕組みにつなげ、建築づくりだけでなく、里山づくりや地域環境づくりにもつなげることが、このセッションの大きな目標です。(鈴木 晋)



千葉の森林再生プロジェクトでの倒木見学会



4年目を迎えて

—地域会の状況を把握し、今後の活動につなげる—



関東甲信越支部長
渡邊太海

過去3年間、皆様から支部活動に対し、応援や励まし、また厳しい意見もいただきました。本年2月から各地域会を訪問し、地域会の現状を聞き、「建築家大会2025千葉」への協力や本部理事会の動きなどを伝えてきました。

支部地域会の会員所属について

最近、支部選挙の電磁的方法の打診を一斉メールしたところ、回答率は約3割、広報委員会からのメルマガ開封率は約5割でした。過去5年間の全国大会の関東甲信越支部正会員の登録者数は、各大会とも1割を切っています。また正会員1,447名のうち東京都内在勤者は1,023名で、半数は地域会に所属していないことが分かりました。

全国他支部では地域会に所属していない会員は皆無で、地域会を通して情報共有がなされています。一方、本支部の特に東京都内では地域会を通じた在勤者への連絡体制が整っておらず、活動の認知度や参加率が低くなっていると思われます。東京都内は過去の経緯から仕方がない、人数が多くてまとまらない、在勤場所だと地域との接点がないので入る意味がない、など理由は多々あり、この状態になっているようです。

支部の地域会規約には「支部は正会員全員が地域会に所属することに努める(支部規定13条)」とあり、今まで、支部執行部はこの規定に対する意識が薄く怠けていたと反省しています。全会員の所属を明確にするため、正会員はまず在勤の地域会に所属するとし、そのうえで他の地域会に所属しても良いとします。「JIAnet」では簡単に正会員の在勤場所が検索できます。事務局に聞かなくても名簿作成ができます。地域会に所属し活動に参加する一歩として、JIAの連絡体制を確立したいと思います。

支部の活動と公益について

東京都内の地域会を訪問して感じたことは、運営の人材が不足し、代表、幹事、会計の人選で精一杯な状態が散見されていることでした。

JIAは公益社団法人のため、公益事業が多くなければ法人格を取り下げられます。支部では、各地域会の公益活動に使われることを前提に予算配分をしています。ところが地域会は公益活動が毎年できるほど人も時間もさけず、予算を繰り越し、数年後に執行するなど予算活用

方法に苦心している様子が見られます。

支部としては、特に東京都内の地域会の会計は支部一括とし、地域会内の会計にかかる時間を減らし、活動時間を主に公益活動に充てられる環境にすることが重要と考えています。また、繰越金のあり方や、少人数でも可能な公益活動を示していきたいと思います。

一方、支部委員会では活動のために参加者から会費を集めたり、協賛を募ることが前提になっている委員会もあります。公益活動として許容される受益者負担は求めながら、公益活動を疑われるような過度な金銭のやり取りに注意していきます。支部の限られた予算をどのように地域会や委員会に配分するか、活動内容と活動費について再検討いたします。

JIAが行うべきこと

各地域会を回るなかで、「執行部は、組織論ばかり考えていないか?」「資格制度を明確にして建築家の定義を作ることで良いのか?」「JIAはこんな人、こんな活動をしていますと広報するだけで良いのか?」との声をいただきました。また「JIAの意義は何で、ほかの団体との違いは何か?」を明確にできなければ社会からも認められず、若い人も入会しない」とのご指摘ももつと感しました。

JIAは公益社団法人であり、その活動は社会にとって有益なることを前提としています。JIAは建築家の集まりです。建築家であることの4原則は、専門能力(教育と実務)、自律性(客観性)、献身性(依頼者と社会へ)、責任(自覚)とUIA協定で明記されています。

日々の仕事や活動はJIAの考えや建築家の4原則に合っているのか? 市民と共に考えることや、クライアントや自分のためだけでなく、社会にとって有益となることを忘れていないか?

建築家であることを自覚し、胸を張って市民と向き合える建築家の集まり、それが他の団体にはないJIAであることを広く発信し、1年間活動してまいります。

●地域会訪問記録と在勤人数

来訪日	地域会	在勤人数
2月25日	目黒地域会	41
3月6日	三多摩地域会	35
4月1日	港地域会	145
4月2日	中野地域会	19
4月4日	城東地域会	93
4月8日	文京地域会	48
4月9日	埼玉地域会	39
4月19日	新潟地域会	21
4月24日	城北地域会	39
4月30日	千代田地域会	217
5月12日	世田谷地域会	55
5月13日	山梨地域会	10
5月28日	新宿地域会	109
6月3日	城南地域会	57
	杉並地域会	27
	渋谷地域会	87
	中央地域会	51
	千葉地域会	56
	神奈川地域会	130
	長野地域会	63
	栃木地域会	7
	群馬地域会	20
	茨城地域会	22
合計		1391
(内訳)	東京都内地域会	1023
	県域地域会	368

海外・不明	56
関東甲信越支部 会員数	1447

JIAnetより検索(2025.5.5時点)

対極的な二人の師

よしはる
金箱温春

1977～1992年 横山建築構造設計事務所 在籍

構造設計における私の師匠は横山^{ふがく}不学さんと木村俊彦さんのお二人である。横山先生は前川國男さんの大学の同級生であり、卒業後は日本銀行や東京都における官庁営繕での実務を経て、1951年に横山建築構造設計を開設された。我が国の専門事務所としては草分けである。木村さんは横山事務所に在籍の後に独立されている。

たまたま大学時代に横山先生にお会いしたことがあり、皆が行かないところもよいかと思い横山事務所に就職した。先生は実務にはほとんど関わらず、原稿を書いたり会合に出かけたりしていた。設計が終わると内容を説明して図面にサインをもらうことになっており、その際には少し話をかわすことができた。具体の設計内容よりは構造設計についての考え方を問われ、持論を話されることが多かった。このころに先生が書かれた「構造計画論」を読んでいたら、構造計画の崇高な理念というものは実感として理解できていなかった。

入社して3年目に担当した「国立国会図書館新館」の基本設計では、柱をダブルに配置する構造計画を考えて説明し、「クリエイティブな発想でよいですね」と言われたことが忘れられない。5年目に「夢の島熱帯植物館」という大空間のプロジェクトを担当し、気合を入れて設計した。完成した時に横山先生に見ていただき、「すごいですね」の一言だけの感想であったがよい思い出である。ともかくとても穏やかな方で、構造計画の理念や構造家の職能について考える機会を与えてくれた師である。

事務所に入って9年目に「水戸芸術館」のプロジェクトで木村さんと出会うことになる。木村事務所が多忙なため協力依頼があり私が志願した。据じれた塔の設計は木

村さんが、塔以外の5つの施設を私が担当し、実施設計期間は8ヵ月の短期決戦であった。木村さんは横山先生とは対照的にアグレッシブで激しい方である。磯崎アトリエと一緒に打ち合わせに行くと、その場で計算をして次々と構造を決定していく。「検討して後で回答します」と発言したら怒られた。ある時「意匠設計がなかなか定まりません」と報告したところ、また怒られた。「構造設計は飛ぶ鳥を鉄砲で撃つことと同じだ、この瞬間に鳥がいる所を撃つてもあたらないだろう。鳥がどの方向に飛ぶかを見定めて撃つんだ」と言われた。建築デザインをよく理解して方向性を見極めるということである。今となっては、自分がスタッフに同じようなことを言っている。

「水戸芸術館」の完成後に「東京国際フォーラム」や「京都駅」の構造設計チームにも呼ばれた。前者は渡辺邦夫さんと佐々木睦朗さんなど、木村事務所のOBと一緒にだった。当初は困惑したこともあったが、次第に木村さんの設計の発想や進め方が理解でき怒られることもなくなり、共通意識をもとにして話をするできるようになった。

30代はこうして過ぎ、なかなか独立のタイミングがつかめなかった。1989年に横山先生が逝去され、「京都駅」の基本設計が完了した機会に独立し、「京都駅」の設計には引き続き関わった。このように「水戸芸術館」以降は横山事務所在籍中から独立後にかけて木村さんとの仕事が多く、実務においての師である。

対極的な二人の師に出会えたことは構造設計者として幸せであった。今でも実務で困ったことがあると、お二人ならどう考えるかと思いをめぐらすことがある。



横山不学先生との歓談のひとつ

「水戸芸術館」の竣工式で磯崎新さん、木村俊彦さんと共に。 「水戸芸術館」の広場と美術館
左端が筆者

第36回 JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2025

地域の中の建築家 タウンアーキテクトの今を考える

開催日：2025年3月4日（火）～3月8日（土）

会場：横浜役所（アトリウム・協働スペースAB・展示スペースA）

神奈川地域会の 2024年度を振り返って

2024年度は、毎年秋に行う「建築フォーラム」は、能登半島で「令和6年能登半島地震」の後に計画されている「みんなの家」をテーマに開催しました。年度末の「かながわ建築祭」は、卒業設計コンクールやシンポジウム、展示など充実した催しとなり、1週間を通しての来場者は2,000人を超えました。来場者アンケートでは「普段分らない建築の世界が身近に感じられて良かった」など好意的な意見も多数いただき、公益社団法人として、公共性の高い場所でのイベント開催の意義が多少なりとも認められたかたちとなりました。このような開かれたイベントを本年度も開催したいと思います。

神奈川地域会 11 代代表

柳澤 潤



「神奈川県建築会議」主催の、山本理顕氏によるプリツカー受賞記念講演も昨年12月に実施。三会代表らが毎月集い、防災や災害時の議題を話し合い、他にも耐火木造などの勉強会や建築見学会の実施など、お互いの良さを発揮できる会議になりつつあると実感しています。

昨年の課題でもあり、まだ実現していないことの一つに、他地域会との連携があります。「タウンアーキテクトの可能性」を追求しながら、本年度も神奈川地域会として他団体との連携や協議を深め、また神奈川県建築会議も充実させ、若手建築家や会員にとって実りある活動を実践していきたいと思っています。

かながわ建築祭レポート

祭典を通して 地域に建築が広がる

建築祭実行委員長
井上雅宏



「地域の中の建築家 タウンアーキテクトの今を考える」をテーマに掲げた「かながわ建築祭2025」は、1週間わたる多彩な催しを通して、建築を起点とした地域の活動、神奈川に根差す近代建築の歴史、そして未来を担う学生たちの提案と向き合いながら、建築家としての根幹を見つめ直す貴重な時間となりました。

本年の建築祭の開幕は、J. H. モーガン設計の「旧根岸競馬場一等馬見所」（1929）を中心とする歴史的建築群にスポットを当てた「まちあるぎ」と講義から始まりました。案内人は、JIA神奈川まちづくり保存研究会の笠井三義氏。ベーリックホール、横浜山手聖公会など、モーガンが残した横浜・神奈川の建築を巡りながら、設計思想や歴史的背景、修復技術、さらにそれらを未来へどう継承していくかについて丁寧な解説がなされました。

建築祭は、昨年に引き続き横浜役所1階を中心に展

開。会場には「近代建築展」「JIA神奈川会員活動展・アワード」「神奈川県7大学1専門学校卒業設計コンクール」など、建築に関する多角的な展示が並び、市民との対話を生む空間となりました。

なかでも「近代建築展」では、笠井氏や井上玄幹氏による近代建築の写真をはじめ、旧横浜松坂屋西館のレリーフを再現した石膏作品、旧根岸競馬場パドックの建設中映像など、多様なアーカイブが紹介され、神奈川県内の近代建築の魅力を一望できる貴重な機会となりました。また「JIA神奈川会員活動展・アワード」では、会員建築家や協力企業による設計実績や建築技術、製品が展示されました。学校や庁舎、住宅といった多様な用途の建築に加え、横浜市庁舎を実際に施工した技術なども紹介され、建築家・技術者が社会に果たす役割と可能性が可視化されました。展示に触れた来場者の中には、建築の裏側にある技術力とデザインの融合に改めて感銘を受けたという声も聞かれました。

今回の展示設営は、雪と強風という厳しい気象条件のなかで行われました。特に卒業設計コンクールの搬入時には、学生たちが寒さに震えながらも、力強い笑顔と

もに作品づくりに取り組んでいた姿が印象的でした。各校代表の作品は、地域性や社会的課題を鋭く捉えたものであり、アトリウム空間が一気に「建築の祭典」へと変貌し、場そのものが作品と呼べる仕上がりでした。

そして、特に来場者の注目を集めたのが、藤沢市で行われている「ふじさわこどもまちづくり会議」。JIA 神奈川会員・三原栄一氏が30年にわたって続けているこの取り組みは、地元の小学生が自ら設計・制作した2,700mm四方の巨大なまちの模型を展示。段ボールで形づくった建物や、つまようじに毛糸を巻いた街路樹など、子どもたちの豊かな発想と手仕事の温もりが随所に感じられるもので、子どもたちから「図工でつくってみたい」という声もあがりました。この活動は、子どもたちが成長しても地域との関わりを持ち続け、次の世代へと経験を受け継いでいくという、まさに建築を通じた“地域教育”の核として機能しています。

シンポジウム「タウンアーキテクトの今と未来」では、建築家として地域にどう関わるかという視点で4組が登壇。後半のディスカッションでは、建築家が地域に「形を与える」存在ではなく、「共に巻き込まれながら発見する存在」であるべきという意見が交わされました。それぞれ異なる視点から語られた活動事例は、今後の「タウンアーキテクト」の在り方に新たな可能性を示すもので



イベント会場となった横浜役所アトリウム
(写真：TERAKAWA 写真事務所 (JIA 神奈川個人協力会員))

した。

卒業設計コンクールでは、各大学の代表学生が1年かけて取り組んできた成果を披露。社会的文脈を読み解いた設計提案には深い考察が込められ、西田司氏は「建築が世の中と応答しはじめている」と述べました。審査員の藤原徹平氏、海法圭氏も、「卒業設計は終わりではなく始まり」であり、建築家や社会人としての長い道のりの第一歩だと語り、学生たちに熱いエールが贈られました。

今回も、建築を通じて生まれる「祭典の喜び」が、多くの人々に広がったことを誇りに思います。来年の再会を楽しみに、次の1年も一步一步進んでまいります。

シンポジウム

「タウンアーキテクト」の今と未来

担当 柳澤 潤

3月7日に横浜市庁舎1階協働スペースにて、4組の建築家またはチームの皆さんをお招きし、シンポジウムを行いました。前半は各組が現在行っている活動の紹介、後半はそうした活動の可能性に焦点を絞り議論しました。

武蔵新城を中心に活動している佐屋香織さん、藤木俊大さん(ピークスタジオ一級建築士事務所)は、現在「パークPFI」という川崎市の制度に応募し、公園を管理・運営しながら自身の設計事務所も運営するという、非常に珍しい公共的な取り組みを実践されています。酒谷幹将さん(藤原酒谷設計事務所)は、自身が住んでいる金沢文庫で空き家を改修し、1階を地域みんなの家、2階を貸家としてリノベーションしながら、地域の活動を継続的に仕掛け、いつの間にか空き家がまちの公民館のような役割にも変容した事例を紹介いただきました。大学の教員でもあり、研究と実践を両立しているところが大変ユニークな試みだと感じました。矢野泰司さん、雄司さんご兄弟(矢野建築設計事務所)は、高知での半公共

的な仕事は建築の開き方(構成)と解き方(プランニング)が一致した清々しい印象に加え、東京との二拠点で継続的に地元の方々の相談を受けながら、地元にいつの間にか「巻き込まれ」ながら仕事をしている、とソフトに話す姿に共感しました。最後は藤沢で30年近く地元の子どもたちとまちづくりワークショップを行ってきた三原栄一さん(アトリエエーワン)。“地域教育”という言葉を使い、市長をはじめ行政の方を説得しながらワークショップの持続性の重要さとその可能性について話されました。これらのワークショップを支えるファシリテーターの学生たちの継続的なサポーターとしての取り組みも考えさせるものがありました。

後半のディスカッションではこれからの「タウンアーキテクト」としての役割として、上からかたちを与えるのではなく、地域に巻き込まれながら、地域に寄り添ったかたちの発見、地域の特徴をとらえた建築を含めた活動のあり方の追求が建築家として問われるのでは、という議論にもなりました。4組の建築家の全く異なるアプローチから、今回はタウンアーキテクトの可能性の一端を明らかにできたのではないかと思います。

神奈川 7 大学 1 専門学校卒業設計コンクール

公開審査会では、審査員長を務められた西田司氏、審査員でJIA新人賞を授賞された藤原徹平氏、海法圭氏が白熱した議論を展開し、各々の学生の熱量をしっかりと汲み取りながら評価をされました。

金賞は渡邊凜さん(横浜国立大学)「狭く厳しいまちで生きる人々に広がりを与える祈りの空間―自力建設によって継続する新しい巡回教会―」、銀賞は石橋千夏さん(東海大学)「坂を築く」、銅賞は大島遙さん(東京工芸大学)「地表5cmの小さな冒険」が受賞され、金賞・銀賞のお二人は全国大会へ進出されます。

また個人賞では、西田賞に谷山祐基さん(関東学院大学)「降灰地景 処分場のその後の在り方を示す提案」、



担当 伊藤立平 八板晋太郎 濱田慎太

藤原賞に井口雄貴さん(慶應義塾大学/理)「歪みのリズム―制約を調律する集住泊建築―」、海法賞に井村伽成さん(関東学院大学)「彼岸此岸の間で生きる―「受け入れ・残し・使う」住環境の更新方法についての提案―」が選ばれました。惜しくも受賞を逃した作品についても総じて完成度が高く、作品展示に対しては、「アトリウムがまるで華やかな展覧会のようなものである」と西田氏が表現されていたのが印象的でした。

シチズンアワード
JIA 神奈川会員活動展

担当 仲亀清進

神奈川地域会は個人会員160名、法人会員50社が所属する大きな地域会です。「JIA 神奈川会員活動展」では、会員の皆さんの設計事例や取り組みなど、多彩な内容をアトリウムに展示し、市民に向けて紹介しました。「建築と人とのつながりを広く知るよい機会」との感想も寄せられています。

そして、昨年に引き続き「シチズンアワード」と題し、来場者の方々に共感した作品や活動に「いいね！シール」を貼っていただくことで投票を募りました。建築祭最終日の3月8日に評価会を行い、今年は次の方が最優秀賞と準優秀賞を受賞されました。

最優秀賞 株式会社 梓設計
「藤沢市新庁舎」

準優秀賞 株式会社 ジェイ石田アソシエイツ
「鎌倉十番館(共同住宅)」

受賞者コメント



藤沢市新庁舎は、「人・環境にやさしい市民に親しまれる庁舎」を目指し、藤沢市の特徴である豊かな自然や海、環境への取り組みを表現し、「環境配慮型庁舎」を実現しました。まちとつながる市民への開放エリアと職員が快適に執務を行うエリアをいかに共存させていくかが、設計から工事段階まで一番議論になったところです。発注者、設計者、施工者の円滑なコミュニケーションにより完成しました。竣工後も、ホール空間や屋上テラス、市民利用会議室、議場ロビーにおいて、日常的な学生の人気自習スペースとしての利用や、テラスでの音楽イベントなどに市民利用が盛んで好評をいただいています。

(梓設計 杉本憲治)

旧根岸競馬場をめぐるまちあるき



担当 清水智津子

3月2日(日)にかながわ建築祭の催し一番手で「旧根岸競馬場をめぐるまちあるき」を開催しました。2025年1月、新たに横浜市認定歴史的建造物となった「旧根岸競馬場一等馬見所」は、これまでも神奈川地域会で何度か紹介し、かながわ建築祭ではパネル展示も行っていました。設計者である建築家J. H. モーガンは他にも横浜で多くの

実績を残しており、それらをめぐってから旧根岸競馬場に行くルートで、保存活動に関わってきた笠井三義氏から直接解説を聞くことができるまち歩きでした。

当日参加人数は募集定員いっぱいの20名ほどで、毎年参加してくださっている方や笠井氏の解説が聞けるといことで参加された方など、続けているからこそその参加理由を聞くことができました。

最初は横浜市開港記念会館に集まり、これから見る建物のレクチャーがあり、最近発見された建築中の根岸競馬場の動画なども見ることができました。まち歩きは会場から電車で元町・中華街まで移動し、アメリカ山公園から旧根

岸競馬場まで約3kmの道のりでした。横浜市イギリス館、横浜地方気象台の擁壁、横浜外国人墓地の門、横浜山手聖公会、エリスマン邸、ベーリック・ホールをめぐり、各所で笠井氏の解説を聞きながら進み、歴史的には山手の境といわれていた打越橋を見て夕日に包まれるころ、旧根岸競馬場にたどり着きました。旧根岸競馬場の横顔が馬に見えるとのレクチャーを受けてか馬の顔にしか見えない一等馬見所を眺めながら質疑タイムがあり、終了しました。

参加者からは「たくさん歩いて大変だったけれど、楽しかった」「知らないことがたくさん知れて良かった」「笠井さんの知識には脱帽です」など満足感あふれる感想が多くありました。多世代にわたる参加者に感謝です。



横浜山手聖公会

旧根岸競馬場一等馬見所
(写真：TERAKAWA写真事務所
(JIA 神奈川個人協力会員))

建築フォーラム 2024

「みんなの家」—能登の現在と未来—

2024年12月7日 関東学院大学横浜・関内キャンパス

今年度の「建築フォーラム」は2024年3月に行われた「～地域の中の建築家～今「みんなの家」を考える」に引き続き、2024年元日に起こった未曾有の能登半島地震後、能登地方で「みんなの家」を計画中の6組の若手建築家と「能登復興建築人会議」にも参画している金沢工業大学の竹内申一教授を招き、能登半島地震で被災された地域の現状と、奥能登と呼ばれる小さな集落に建つ予定の「みんなの家」プロジェクトを発表してもらった。

竹内教授からは分断されたインフラやコミュニティの再構築の難しさ、災害公営住宅の普及に対するスピード感などへの不安と現状が説明された。また能登半島地震のあとに学生間で作られた災害サポートネットワークの状況が語られた。また6

組の建築家(久山幸成氏(狼煙町)、榮家志保氏(鉢ヶ崎)、近藤哲雄氏(大谷町)、廣岡周平氏(飯田町)、松田彩加氏(深見町)、工藤浩平氏(鵜川町)※発表順)がそれぞれの地域に寄り添いながら、地域のNPOと一緒に、単なる公民館ではない、その地域独特の「生業」を継続しながら利活用される「みんなの家」を目指していることが大変印象深かった。

後半のシンポジウムでも、能登という地勢的なネットワーク構築の難しさの共有と、「みんなの家」が今後「小さな公共」としていかに地域に溶け込むか、また受け入れられるか、という議論が継続的に続けられることの重要性が説かれた。

(柳澤 潤)

講演会

山本理顕氏プリツカー賞 記念講演会「建築家の責任」

2024年12月20日 神奈川県民ホール

2024年12月20日に開催された山本理顕氏プリツカー賞記念講演会は、神奈川県建築士会、神奈川県建築士事務所協会、日本建築学会関東支部神奈川支所、そしてJIA神奈川の四会が合同で開催した会となり、その意味でも非常に意義のあるものとなった。前もってこの講演会に向けて山本氏からいただいたタイトル「建築家の責任」は、単に受賞に応答するように自身の作品紹介を行うのではなく、極めてメッセージ性の高い内容を語っていただけるのではないかと期待は高まるばかりだった。

当日、会場は建て替えが決定した海岸通り沿いの「県民ホール」に、300人近い聴衆が集まった。まずは、受賞時の様子をまとめた動画の紹介から始まった。全て英語のまま、翻訳なく過去の受賞者たちの賛辞が続く映像である。多くの建築家が、山本氏を単なる作品主義の建築家ではなく、建築が社会的意義を持つことを主軸に置いた活動家的な立場をとっていることを賞賛していると理解した。

講演の様子(写真：TERAKAWA写真事務所
(JIA 神奈川個人協力会員))

山本氏の話は、自身の長きにわたる思想と設計の礎となっている「闊論」から始まった。ハンナ・アレントを引用しつつ、古代ギリシャやロー

マ時代の住居形式に見られたno man's landこそが建築にとって重要な空間であり、それは公的領域と私的領域を調停するものとして根本的に存在するものだったという。そのような空間が失われた現代の都市空間において、一途に、頑なに主張し続けた集大成として「地域社会権主義」がある。

唯一紹介された作品、韓国の「バンギョ・ハウジング」は、各住戸のエントランスとなる地上階がガラス張りの大胆な住居形式である。竣工当初は空室が目立っていたというが、徐々にその豊かさに人々が気づき始め、今では全住戸が埋まり、ガラス張りの地上階は住人たちのコミュニティの場となっているという。山本氏も招待を受け宴を楽しんだようだ。20世紀のどこかで失われてしまった公でも私でもない場所、それが当たり前存在する豊かな世界を山本氏は夢見続けている。それは自身の作家性のためでも、もちろん私利私欲のためでもない。世の中がどうなっていくべきか、人々にとって何が重要なかを空間を持って表現していく。それに突き進んでいる姿に「建築家の責任」を見た。

余談として大阪万博のパヴィリオンについて触れた。そこに多数関わっている建築家やプロデューサーに、この深く真摯な姿勢が存在するのか、大きな問いかけをもって閉会となった。

(田井幹夫)

建築まちづくり委員会

湯の建築まちづくり

—住民参加の別府まち歩きワークショップ—



むらじ
連 健夫
JIAまちづくり会議、
副議長



松村哲志
建築まちづくり委員会
委員長

JIA建築家大会2024別府において、JIAまちづくり会議、関東甲信越支部・建築まちづくり委員会、日本建築まちづくり適正支援機構(JCAABE)の協働で、まち歩きワークショップを実施しました。これは、2023年の常滑大会に続くもので、住民と学生と建築家が一緒にまちを歩き、まちのタカラ(良い点)、アラ(問題点)を見つけて分析し、タカラを活かす、アラを解決する提案をするプログラムです。

まちづくりは市民が主体であり、専門家や行政がそれをサポートするファシリテーションが求められます。このため、事前に参加建築家に、ワークショップのやり方やファシリテーションについての共有が大切です。また、別府のまちづくりの現状の理解、湯をテーマにしたまちづくりの知識も必要なので、大会前のマンスリー企画として、2024年10月11日にオンラインシンポジウム「銭湯でひとをつなぐ活動／別府のまちづくり／地域を活かす建築家のファシリテーション」を行いました。

湯をテーマにしたオンラインシンポジウム

栗生はるか氏(せんとうまち代表理事)からは、文京建築会ユースの「銭湯と人をつなぐ活動」について話をいただきました。地域の銭湯が次々になくなっていく中で、もったいない、文化を継承したいとの気持ちで仲間と共に、解体前に人を巻き込むイベントを行い、解体建物のパーツを使って山車をつくり、それで銭湯周りのお祭りをするなどの活動を継続的にされている。この中で、



銭湯山車で街を巡るお祭りイベント

文化としての銭湯の再認識や人と人がつながり、昔なつかしいコミュニティが育成されている点が興味深い。銭湯そのものに癒しがあり、リラックスする中で自然に会話が生まれ、つながりが生まれるという湯の本質的な良さが、栗生氏の活動の中で浮き彫りになりました。

次に「別府のまちづくり」について別府市建設部施設整備課の籠田真一郎課長に話をいただきました。別府は何と言っても温泉、さまざまな所から温泉が湧くので、住民にとっては身近であり、観光資源としても大切で、それをどう維持させるか、どう活性化させるかがポイントとのこと。別府駅の海岸側の旧市街地と山側の市街地との地勢的特徴を分かりやすく説明いただくとともに、シャッターで閉じがちな商店街の活性化、海側と山側とのつながりをどうつくるかなどの課題もご紹介いただきました。

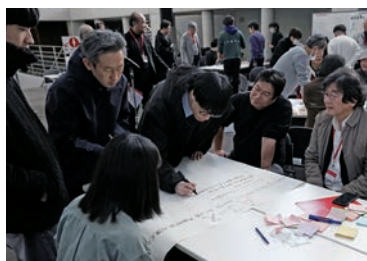
連健夫(筆者)からは、「まちづくりファシリテーターとは何か?」をテーマに話しました。ファシリテーターとは調停者・促進者であり、住民と行政、専門家をつなぎ、話し合いをまとめて方向性をつくるという役割を担います。ポイントとしては、住民と同じ目の高さで話すことです。建築家は専門家なので情報を持っており、どうしても先走ってしまう傾向がありますが、まずは住民の話をしっかり聞き、それを膨らますことが大切です。また建築家はデザインができるので、住民の言葉を膨らまして具体化のデザインイラストを描くことにより方向性をつくることなど、コツを含めて説明しました。

ディスカッションでは、湯を活かすまちづくりとして足湯をさまざまな所につくことや、住民参加のまちづくりによって能動的でかつ持続性ある街づくりになること、歴史・文化・人をつなぐことの大切さなどが話されました。併せて、まち歩きワークショップの参加建築家には、事前にJCAABEのまちづくりファシリテーター養成講座(2023年度日本工学教育賞、2024年度日本建築学会教育賞)の動画を観て学習できることなどが紹介されました。

(連 健夫)



前半のまち歩き。ポインターで指差して撮影



後半のディスカッション



地図に写真とメモを貼り分析



チームごとにまとめた分析と提案を発表する

まち歩きに向けた準備：“ゆるく”かつ“綿密に”

まち歩き開催に向けては、地域に根付いた専門家との協働が欠かせません。今回は長年にわたり別府のまちづくりに携わってこられた大分大学准教授 姫野由香先生をゲストファシリテーターとしてお迎えしました。姫野先生とつながりを持つことができたのはJIA九州支部をはじめとした建築家たちの日々の地域活動の賜物です。

開催に向けて最初の準備として、まち歩きのコース設定をしました。地域の特徴や状況、進行中のまちづくり活動や今後に向けた視点など、地域の専門家と相談しながら行いました。コースといってもあまり決めすぎないことが大切です。今回はスタートとゴール、途中のチェックポイント、大まかなエリアをゆるやかに設定することで、自由な目線でまちの“タカラ”と“アラ”の発見を促すようにしつつ、時間内に進行することを考えました。このいい意味での“ゆるさ”がまち歩きの準備においてはポイントといえます。

参加者は住民、市民、地元大学生、全国から集まったJIA建築家と多様であることから、申し込み制とし、チーム編成を事前に行いました。ここでもある程度の飛び入り参加を歓迎するなど、臨機応変にゆるやかに運用していくことが大切です。

ワークショップ まち歩きとディスカッション：地域と伴走する未来に向けて

ワークショップは、前半に“まち歩き”、後半に“ディスカッション”を実施しました。開始に先立ち、ファシリテーターは事前ミーティングを行います。役割分担、流れのポイント、主役である住民・市民の意見を引き出す態度、楽しむことを再確認してスタートしました。ワークショップは始まればまさに“生き物”です。各メンバーが尊重し合い、自由に各自が目的に向かって動いていきます。そのためには事前ミーティングは大切なポイントです。前半の名脇役である小道具の存在も忘れてはいけません。“タカラ”と“アラ”を「ポインター」で指差して「インスタントカメラ」で撮影。ポインターは対象を明確にする役割を持つとともに楽しさを演出し、インスタントカメラは記録の効率化を促し、後半のディスカッションにつなげていく役割を持つ。これらの小道具を使

い役割を交代させることで、より多くの参加者に直接的に関わってもらう機会をつくります。

まち歩きを終えた参加者はゴールであるディスカッション会場「ビーコンプラザ」に集合し、後半のディスカッションが始まりました。ディスカッションは「分析」と「提案」の2つを協働して制作。分析は中央にエリアマップを配置したシートに集めてきた写真を貼り付けます。同時にメモしておいた感想やコメントを書き込んでいきます。図やスケッチがあっても良いでしょう。また相反する意見や分析も大歓迎。ありのまま記録します。ここでは分析に徹することがポイントです。

分析がまとまったらまちの資源を生かす、課題を解決する提案を行います。ここで何よりも大切なことは「主役は住民・市民」であり、伴走者であるという態度です。ファシリテーターは参加者の意見を引き出し、時には言葉に表しきれないアイデアを図やスケッチに表現。まさにファシリテーターである建築家の番番です。時には少ない言葉でフックを与え、参加者から意見を引き出すこともポイントです。住民の意見を引き出し起こった化学反応がまちづくりの活動を“自分ごと”にして、生き生きとしたものに変えます。提案は“てんこ盛り”くらいがちょうど良いでしょう。今後が続いていくまちづくりは、多くの選択肢を残していくことが可能性を広げます。発表を行い専門家にコメントをもらうことで参加者全体に情報共有が進み、次へとつながります。最後に集合写真を撮影して終了しました。

ここには多様な人たちが入り混じり、未来に向かう充実した笑顔が溢れています。こういった笑顔をつないでいく種まきを今後も続けていくことが、JIAらしい活動であると考えています。

(松村哲志)



参加者全員で記念撮影

須藤玲子氏に聞く 伝えたいことを布で表現する



今回お話をうかがったのは、テキスタイルデザイナーの須藤玲子さん。テキスタイルデザインスタジオ「NUNO」を主宰し、空間インスタレーションや建築家との協働作品など、さまざまなテキスタイルを数多く手掛けています。日本各地の染織産地や職人と交流を持ちながら、独自の発想で布づくりを続ける須藤さんに、「NUNO」の立ち上げ時から、現在の活動までをうかがいました。

——学生時代からテキスタイルに興味があったのでしょうか。

高校生の頃は着物の柄を描く友禅作家になりたくて、日本画を学んでいました。武蔵野美術大学の日本画学科を志望していましたが、思い描いたようにはいかず、武蔵野美術大学の短期大学に入り、工芸デザイン科に進みました。工芸デザイン科ではさまざまな素材を扱うのですが、それがとても面白くて。だんだん織物に興味をもつようになっていきました。ただ夢は捨てきれなくて、日本画のトレーニングも続けていました。

織りの技術を習得し、しばらくは手織り作家として建築家の友人が手掛けた商業空間に飾るタペストリーやファブリックパネルなどをつくっていましたが、年に1点程度の織物だけでは食べられなくて。たまたま日本画を習っていて絵が描けたので、大手の繊維メーカー何社かと嘱託契約をして、シャツや毛布といった寝具のテキスタイルの図案などを描く仕事もしていました。

——手織り作家からテキスタイルデザイナーに転身されたきっかけをお聞かせください。

1983年、29歳のときにテキスタイルプランナーの新井淳一さんの展覧会を見て、新井さんと出会ったことが大きいです。新井さんは、当時山本寛斎さんや森英恵さんの生地をデザインされていて、当然お名前や作品は知っていました。展覧会会場は小さなギャラリーでしたが、天井から布がたくさん掛かっていてとにかく圧倒され、ちょうどご本人も在廊されていました。

新井さんのテキスタイルは、ファイナルプロダクトとしていろいろなデザイナーの作品になって存在していましたが、手織りをしていた自分の布よりも手の跡が感じられるのです。服の状態で見るとテキスタイルの魅力と、一枚の布としての魅力は全く異なり、それを強く感じた素晴らしい出会いでした。

そしてそのとき、私は自分が描いた図案を持っていて、新井さんに何をしているのか聞かれて話す中で、突然「テキスタイルの店を作るので一緒にやらないか」とNUNO

の立ち上げに誘われたのです。そのときはあまり本気にはしませんでした。その後ご縁が重なり、思い切って契約していた仕事をほぼ辞め、株式会社布の立ち上げに参加することにしました。そして1984年の4月、ここ六本木AXISで、新井さんと新井さんの友人と私の3人でNUNOをオープンしました。店番や販売の経験などありませんでしたから、正直とても不安でした。

——NUNOはどのようなコンセプトの店としてスタートしたのでしょうか。

設立当時から変わらぬコンセプトは「つくる人から使う人へ」。布をつくっている人の思いを使う人に伝えるということを大切にしています。最初はスカーフや服など加工したものは販売せずに、テキスタイルだけ、それも生成りと藍と墨の3色だけを扱っていました。扱う布は、新井さん自身がデザインされた布と、久留米藍や博多絞りなど日本国内の工芸家の作品や、インドのシルク、ボリビアのウールなど、民芸品のようなものでした。新井さんはもともと民芸が大好きでコレクションしていたから、私たちは毎週新井さんのいる群馬県桐生市に通って、倉庫から布を選び、精錬して、染め、刺繍などの後加工を指示して、それを次の週に店に並べる。そんな日々でした。

当時、一般の消費者が買えるテキスタイルは、輸入ものかプリントがほとんどで、ファッションデザイナーが買うような布を買うことができる店はありませんでした。だからよく驚かれましたね。80年代ってなんでも珍しかったんです。世の中はブランド物がもてはやされ、自分で服をつくる時代から既製の素晴らしいものがたくさん生まれた時代。布屋がどんどんなくなっていったときに、私たちはあえて布を売ったのです。

1987年には事情があり新井さんがNUNOの経営から抜けるのですが、私はその後も新井さんの夢を追いかけている気持ちでずっと走ってきました。

たまたま私が自分で着るためにつくったものを見たお客様にそれと同じものが欲しいと言われ、だんだん衣服

も扱うようになりました。新井さんと一緒にデザインもしていましたが、自分の名前でテキスタイルを出し始めたのは2000年からです。

——インスタレーション作品「日本橋こいのぼりなう！」は、鮮やかな色と多様なテクスチャーの生地が印象的でした。NUNOの立ち上げ時から、染織技術や職人との交流を大事にされているのでしょうか。

きっかけは、1998年にニューヨーク近代美術館(MoMA)で開かれた展覧会「構造と表層：現代日本のテキスタイル」(Structure and Surface: Contemporary Japanese Textiles)なんです。1980年代後半に、この展覧会のキュレーターのマチルダ・マクエイドとカーラ・マッカーシーがNUNOを訪ねてきました。MoMAは1949年にバウハウスのテキスタイルの展覧会を開いていて、その50年後の1990年代に再びテキスタイルの展覧会を計画していました。キュレーターの2人は日本のテキスタイルを紹介したいと考えていて、それで一緒に日本中の染織産地を巡ってリサーチしたのです。展覧会に向けて10年間彼女たちと一緒に日本中を歩いて、それまで知らなかった技術にたくさん出会い、とても勉強になりましたし宝探しのような感じでした。

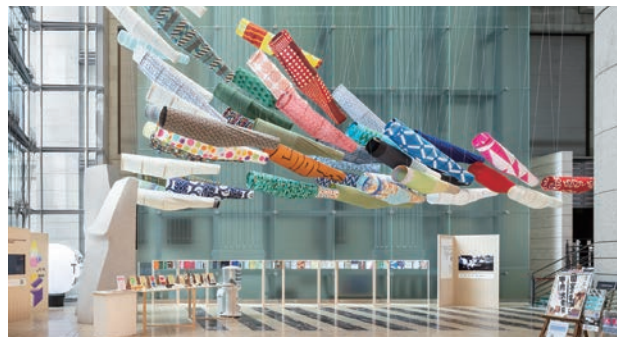
今の布づくりは産地の技術の継承も強く意識していますが、当時はまだそういう意識はなくて、とにかく彼女たちの熱い思いに応えたい、その一心でした。そのときの経験が今のNUNOや私自身のベースになっています。

——テキスタイルをデザインするときは、使われるものによって考え方を変えたりしているのでしょうか。

基本的に使い道は考えずにデザインしています。ただ、具体的に使用用途の要望があった場合は、それに合わせて考えます。たとえば、1992年に私がデザインしたテキスタイルに、ウールと綿を摩擦加工でキラキラさせたものがあります。これを椅子張りに使いたいと言われましたが、そのままの素材では耐久性がないので、ポリエステル100%に変えたテキスタイルを新たに作りました。

NUNOには現在9人デザイナーがいますが、自分たちが伝えたいことを具体化していくことを大切にしています。それを使ってくれる方がいろいろな発想で、椅子に使ったり、絨毯にしたりする。そのときにはじめて次の展開の布づくりに入っていければいいと思っています。

今は、環境についての取り組みも重要で、布づくりのベースにはサステナビリティがあります。これはものをつくる私たちひとりひとりが考えていかなければいけないテーマです。再生というより、循環させていく考え方がとても大事になると感じています。



《日本橋こいのぼりなう！》展示風景 2025年 (写真：Nacasa & Partners)

——伊東豊雄さんなど建築家と協働もされています。

伊東豊雄さんに会ったのは1984年です。ちょうど自邸「シルバーハット」を設計されているときに、子ども部屋に天井から布を吊ってテントのようにカーテンを取り付けました。それからストーブがあって、子どもが危なくないように柔らかいもので覆いたいと言われ、消防服の生地で覆いをつくりました。それをすごく気に入ってくださり、それから「NOMAD(ノマド)」(1986)や「せんだいメディアテーク」(2000)など、伊東さんの仕事はずいぶん関わらせていただきましたし、建築家との仕事も増えていきました。

建築ではテキスタイルと空間のつながりを大切にしています。求められていることを理解するために、設計者とのコミュニケーションは欠かせません。それから、建築空間はクリアしなくてはならない基準がたくさんありますから、試作も多くなり難しい面もありますが、やりがいも感じています。伊東さんと話していていつも共感するのは、「建築はひとりでは絶対につくれない」ということ。規模は全然違いますが、私の仕事も1人ではできません。

——デザインに加えて、性能や技術についての知見も求められるお仕事ですね。

テキスタイルデザイナーというと絵を描いている人だと思われがちですが、布をつくる技術や工場の仕組みなどまで理解しないとつくることができないのです。そういった場で学ぶことも楽しんでます。

私はクライアントからの正式なオファー前でも、それをつくることの意義を感じたら、サンプルづくりなどを始めてしまうことがあります(笑)。これからも自分の探究心の赴くまま、ものづくりを続けていきたいです。

——貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2025年4月15日 六本木AXISの「NUNO」にて
聞き手：関本竜太・渡辺 猛(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

須藤玲子(すどう れいこ)

テキスタイルデザイナー

茨城県石岡市生まれ。株式会社 布 代表、東京造形大学名誉教授。伝統的な染織技術と先端技術を融合したテキスタイルを創作。アドバイザリーボードメンバーを務める良品計画、山形県鶴岡織物工業協同組合などでテキスタイルデザインアドバイスを手掛ける。作品はニューヨーク近代美術館など国内外の美術館に永久保存されている。

アブダビ日本人学校に勤務して



滝澤富明

アブダビ日本人学校は、世界に94校ある日本人学校の1つで、唯一公的に認められてU.A.E.国民(エミラティ)のお子さんを受け入れています。

皆さんは「日本人学校」についてご存じでしょうか。国内の小・中・高等学校と同等の教育を行うことを目的とし、現地の日本人会や進出企業の代表者、保護者の代表などからなる「学校運営理事会」が運営しています。教員は文部科学省から派遣され、2024(令和6)年4月現在、世界49ヵ国・1地域に94校設置されています。原則、日本の学習指導要領に基づき、教科書は日本国内で使用されるものが用いられています。現地の文化や歴史、地理など、現地事情にかかわる授業や現地校との交流も進めています。基本的には日本語を介した教育を展開していて、日本国内と同じく、日本の文化や慣習等を背負った日本人の教員が教育を行います。児童生徒は、日本語で各教科・領域等の学習を受けます。ですから、日本から赴任された駐在の方のお子さんは安心して学校に



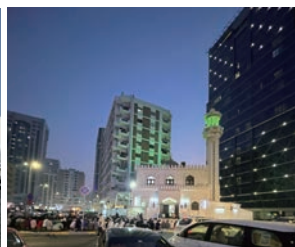
アブダビ日本人学校

適応でき、数年後に帰国される際は、日本の学校に復帰し、進学しやすいと考えます。もちろん、現地の学校やインターナショナル校を選択される方もいらっしゃいます。

アブダビ日本人学校があるU.A.E.について紹介します。アラビア半島の東、アラブ首長国連邦(U.A.E.: United Arab Emirates)は、7つの首長国(アブダビ、ドバイ、シャルジャ、ウムアルクワイン、アジュマン、フジャイラ、ラスアルカイマ)からなる連邦国家です。面積は北海道と同じくらいで、1971年12月建国、53年の比較的若い国です。人口は1980年に100万人、2022年には



約5万人収容可能なグランドモスク



市街地中心のモスク



アブダビの街を見下ろす

1000万人に達しました。エミラティはその12%、他は外国人で、インド人、パキスタン人、バングラデシュ人、ネパール人、スリランカ人など南アジア出身者が50%、その他多くの国から集まっています。

外国人労働者が多く、25～39歳の男性がその3割を占めます。日本人は約4,500人います。日本との結びつきはとても強く、石油の輸入相手国としてU.A.E.は第1位(2024年)で、U.A.E.から見ると日本は輸出国第2位(10%)、輸入国第4位(4%)です。日本車が多く走っており、アブダビのタクシーはほとんどが日本製です。

砂漠の国で、今年5月は日中50.4℃を観測しました。市街地の治安はよく、夜一人で歩いていても危険は全く感じません。アブダビ市はU.A.E.の首都であり、アブダビの首長がU.A.E.の大統領を担っています。

U.A.E.には本校のほか、ドバイ日本人学校があります。アブダビ日本人学校は、日本国大使館付属学校として1978年4月に設立され、創立48年目の学校です。2025年4月現在、小学部49名、中学部16名の計65名が学んでいます。国籍は日本人35名、アブダビ人(エミラティ)30名とほぼ同数です。日本人は、駐在員のお子さんのため、数年で帰国する場合が多いですが、エミラティは幼稚園部も含めて12年間日本語での学校生活を送ります。

職員は、担任をしている日本人教員が9名、児童生徒を支援する教員が7名、その他渉外、事務員、セキュリティ等合わせて40名超の職員が勤務しています。日本の各都道府県で勤務経験がある我々教員は、日本の教科

書や副教材(スキル帳やワークブック、単元テスト等)、ICT機器等を駆使し、日本語で授業を行います。昨年度より一人一台端末が児童生徒に貸与され、授業中はもちろん、家庭学習でもアプリを活用したり、協働的な学習を推進しています。例えば、これまでは紙ベースのドリル帳や問題集を中心に使用していました。しかし、端末を活用することで、担任がアプリで事前に予約配信し、朝学習や授業中、家庭学習などで児童生徒が問題を解いたあとは、一人一人の取り組み具合や正答率、苦手な問題の把握を教師側の端末で確認し、次の指導に役立てています。

なぜエミラティが公的に受け入れられているのか。それはアブダビ教育庁の意向を受け入れていること、日本の国と企業の理解が深いことが理由です。先に述べたように、アブダビ首長国と日本の国の結びつきが強いことも要因です。12年間の課程を修了すると、一定の成績を上げたものは学校推薦を受け、日本の支援を受けながら日本の高等学校・大学へ進学します。学問の習得はもちろん、国の期待を受け、将来日本とU.A.E.(アブダビ)の懸け橋になることが期待されています。エミラティの保護者の、日本人学校に対する日本式教育への期待は高いです。また全児童生徒に対して、グローバル人材育成を目指し、日本の教育課程に加えて英会話学習やアラビア語学習も重視しています。

エミラティと日本人が在籍している学級での学習は、教員として難しい面もあります。エミラティは母語のアラビア語、日常社会で使う英語での会話はスムーズにできます。しかし、当然、日本語はアラビア語や英語とはかなり異なり、日本語で学習するには相当な苦労があることは想像できると思います。

授業日の学校生活はアラビア語や英語ではなく、日本語での会話はもちろん、日本人と同様、読み書きも習得しています。私たち日本人は英語を駆使することも大変なのに、もしアラビア語で話さなくてはならなかったとしたら、相当困難なことが想像できます。ですから、エミラティの児童生徒には、「3つも言語が使えることは凄いな」と伝えています。エミラティ一人一人と話してみると、優しくて親切的な面、熱心に取り組む面は日本人と似ています。しかし当然、両国の文化や慣習の違い、ものの見方や考え方は大きく違っているため、うまくいかないこともあります。エミラティの保護者は日本語を話すことができないため、家庭において学習に対するアドバイスがしにくく、また各家庭にメイドがいて、子どもの教育はそのメイドが相当部分担っていることも多く、宿題や家庭学習に取り組むことが難しいようです。また、



大型モニターを使った理科の授業



日本人とエミラティと一緒に学ぶ

日本と同様、ゲームやネットを使う時間が多いことも悩みの種です。国語、算数などの教科の学習も難しいと思いますが、特に社会科の授業は、日本の公民、歴史、地理を学ぶため困難が伴います。私が受け持つ理科も同様で、計5学年指導していますが、砂漠の国には存在しない日本特有の植物や動物、日本の気候、災害(台風、地震はU.A.E.にはないそう)など、未体験の学習事項があるだけでなく、日本人でも難しい元素名や岩石名等の理科用語を日本語で身に付けることは困難なことです。授業中にエミラティ同士で英語やアラビア語で会話することもありますし、学習が思うように進まずに、ストレスがたまることもあります。

また、エミラティは国策によって経済的に恵まれていることもあり、「私のペン、カバン、……は〇〇(某有名ブランド)です。先生はなぜそれらを持たない?」などという会話がなされます。裕福であり、経済的に満たされているのです。私たち教員は、そのような文化や慣習の違いを慮り、その心情や困難さを理解し、寄り添ったり褒めたり、時には厳しく指導しながら学習活動を進めています。日本の学校でも外国籍の児童生徒が増えています。その子の背景や日本語でのコミュニケーションが図れないことを踏まえた教育活動を行っています。もちろん、日本・アブダビの文化・社会・環境を学ぶための現地理解教育として、消防署や工場、水浄化施設の見学や、マングローブ植林体験等にも取り組んでいます。このようにアブダビ日本人学校では、日本人もエミラティもお互いを理解しながら一緒に学んでいます。

私は2003年から3年間、南米パラグアイ共和国アスンシオン日本人学校にも派遣されていました。その頃一緒に学んだ児童生徒は、社会人として現在、建築士、旅行社社員、サッカーJリーグの通訳、外国語や数学の教員などとして活躍しています。現在のアブダビでの児童生徒、もちろん日本人もアブダビ人も、その将来の活躍を期待しながら接しています。私たち日本人学校教員・職員は、その一人一人の可能性を高める、深める、伸長するため、連帯して教育活動を行っています。

滝澤富明(たきざわ とみあき)

アブダビ日本人学校 教員

新潟市出身。新潟県内の小学校教員歴35年(2003～2005年度はパラグアイ共和国アスンシオン日本人学校)。2024年4月からアブダビ日本人学校に派遣。

なりわい 建築家の生業



南條洋雄

「建築家とは」を私は3人の師匠から学んだ。大学の恩師大谷幸夫先生、RIAの師匠山口文象先生、そしてサンパウロのボス、ジョアキム・ゲデス先生だ。

「修行してひたすら黙々と実績という籠を担いで歩き続けると、後ろからその籠に仕事という玉が投げ込まれる」とは大谷先生の言。建築家はいわゆる営業行為とは無縁との認識だ。「哲学なき建築は真の建築にあらず」とは山口先生の教え。発注者に絶対服従で受注に群がる無様を戒める苦言だ。「真理の追求と独創こそが建築の原点」とはゲデス先生の教え。マニュアル化や模倣に建築の未来はないとの忠告で、少なからず日本の建築界への警鐘でもあった。さて、この3つを励行するとどうなるだろうか。理想論にも聞こえるし日常の現実には照らせば限りなく実践は難しく、結果、路頭に彷徨うであろう。

改めて三師匠の教えを噛み締めてみる。ひたすら優れた実績を重ね精進してきたか。社会や環境に哲学を持って主張を貫いてきたか。独創性をもって自然と対峙しデザインしてきたか。これらを目標に日々精進してきた自負はあるが、客観的な評価を得られたかと問えば、答えに詰まる。そして致命的なのは、長年の建築家としての活動が「生業」として成立したのかといえば甚だ疑問、という現実だ。

40歳でJIAに入会し40年近く経つ。喜寿を超え傘寿も見えてきた今、建築家の生業の厳しさを改めて痛感する。医者は患者を診て、弁護士は依頼人を弁護して報酬を得る。建築家も設計という職能に対する報酬を得るのであって、物を販売しているのではない。ゆえに安価を競う話ではないはずなのだが、設計入札がいまだに堂々で行われる。医師や弁護士の選定に入札などないことを思えば、建築家という職能が社会に認知されていないことを認めざるを得ない。であるから「登録建築家」を名乗ってみても手応えを感じたことがない。

建築基本法制定が突破口になると期待するが、実現はまだまだ先のようだ。そうこうしているうちにJIA会員数は減り続ける。建築五会というが、「建築家」の団体はJIAだけだ。建築士の会でも、学者の会でも、事務所の

会でも、建設業の会でもない。「建築家の生業」を口にできるのは我々JIAだけなのだ。建築家の生業と建築士の生業とはすこし異なる。ましてや教育者や研究者の生業とも違う。建築家の生業が成り立っていないのだ。

40年のJIA活動でも解決しないこの「生業」の問題について、正面から取り組み、社会やメディア、あるいは国土交通省などに向けて「発言してこなかった」のではないか。建築の素晴らしさを巡る議論や活動は極めて闊達だ。が、しかしその一方で経営や収益といった議論を蔑ろにしてはこなかったか。

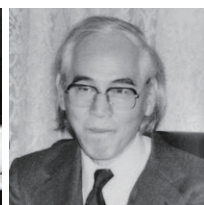
あえて歳を重ねた身だからこそ言及するのだが、「生業」として成立して始めて「名建築」が津々浦々に誕生するのではないか。そのためにはどのような組織であるべきか、どのように人材を招き育てていくか、スペースやコンピュータへの投資をどうするのか、さらに資金繰りという究極の命題にどう対峙するのか、といった議論を日常的に行い「建築家の生業」を確立させ、さらにそれを発展させていくことも大切なのではないだろうか。

今年も多く教育者たちに聞くと設計志望の学生がますます減少気味だという。低賃金で過酷な職業と受け止められる端緒は我々世代の仕業かもしれない。この問題に真っ向から取り組み、魅力ある「建築家の生業」を実現するためのJIAであってほしい。

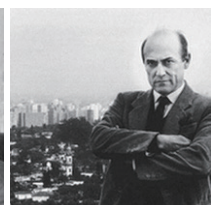
ここで再び三師匠の教えを振り返るのだが、人生を捧げるに値する、それが「建築家」という職能なのではないだろうか。



山口文象



大谷幸夫



ジョアキム・ゲデス

求められるものは何か

宮本夏樹



私は30代前半までは都内で生活していたが、事務所の創立者で祖父でもある宮本忠長が病を患ったことがきっかけで、10年ほど前に現事務所に入所することを決めた。それまで長野は子どものころに夏休みや正月に遊びに行った所、という印象しかなく、そこで仕事をするイメージを持ったことがなかった。生活の拠点を長野に移した当初は、右も左もわからない状態で、地方独特の文化に戸惑ったり、生活の利便性の差に驚いたりしたことを思い出す。ただ思い返すと、その不便さや不自由さがあるからこそ、気づくことも多かった。

我々が事務所を構える場所は、中心市街地から離れた千曲川沿いの、いかにも郊外といったところで、街灯の数も少なく、夜道を歩くには手元に何か明かりをもっていないと少し心もとない。そんな中でも満月の夜は自分の影ができるくらいの明るさに感動し、新月の夜は星の輝きに目を奪われた。貴重な体験であったが、だからこそ人の経済活動においては夜の暗さを灯す明かりや、酷暑、厳冬でも快適に過ごすことができる空間が必要なのだ、その時に自分のなかでようやく腑に落ちた感じがした。長野での生活のなかで、ひとつひとつそういった経験を重ねることで、ようやく長野人としてスタート地点に立った気がする。

我々の事務所は地域に根差した設計活動を理念に掲げている。独自に育まれた文化や、気候風土をはじめとした個々の地域性を真に理解し、設計に反映するには努力と研鑽を続けなければならない。これからはJIAの仲間とともに学び、地域社会に対して貢献していきたいと願っている。



長野の風景

「人」と「まち」とのかかわり

伊藤浩史



新卒で組織系設計事務所に入社して以来、小規模なものから大規模なものまで、多種多様な用途の建築設計に携わらせていただいていた。その中でも、公共施設、駅、商業施設、事務所など、程度の差はあれ、比較的公共性の高い建築の設計が多かった。

不特定多数の人が利用する公共性の高い建築を設計する際は、毎回設計開始時に、建築単体ではなく、その「まち」に建築がどうかかわり、使う「人」がどういう場所としてその建築にかかわるかを第一に考えることを重視してきた。共通の解はなく、毎回、模索しながら計画してきた。提案した方針を関係者間の議論を経て、目標が明確に一つになり、関係者が一丸となって共通目標で邁進できた時ほど、完成した建築は良い結果となることが多い。

完成後に発注者からいただく感謝の言葉も嬉しいが、それにも増して、実際に使う人の笑顔や設計想定以上の創造的な活用の仕方などを見ることができると、より感激であり、次への励みになる。そのような経験が多くできるよう、毎回勉強の積み重ねである。

JIAにおいては、縁あって昨年度より支部活動として学生デザイン実行委員会に所属し、「JIA東京都学生卒業設計コンクール」等の開催にかかわらせていただいている。学生の卒業設計作品や本人のプレゼンなどの熱意に直に触れ、私自身も初心に帰るとともに大きな刺激を受ける機会となっている。

これからも初心を忘れず、設計を通じて「人」や「まち」との建築のかかわりを考え続けていきたいと思う。



横浜市港北区民文化センター「ミズキホール」(2024年)

交流委員会 C・D グループ

合同建物見学会

—奄美大島 & 喜界島—



交流委員会
Cグループ
オイレス ECO
酒巻芙蓉

5月8日から2泊3日で、奄美大島・喜界島において、C・Dグループ合同の建物見学会が開催されました。参加者17名、口々に「滅多に行けない場所」と初日に話していたことが印象に残ります。今回は、喜界島出身Dグループ代表幹事の秋山隆典様プロデュースのもと、結束力ある素晴らしい旅となりましたこと、感謝申し上げます。

奄美大島の奄美パーク、大島紬美術館、喜界島の地下ダムトンネル、2軒の黒糖焼酎酒造、オオゴマダラ観測地、百之台国立公園、荒木海岸国立公園、見渡す限りのサトウキビ一本道、そしてスギラビーチでの民謡とヤギ料理の夕べ、盛りだくさんの3日間、ほんの一部ですが紹介します。

奄美パーク見学

2つの島を巡る旅では、奄美大島での飛行機乗り継ぎ時間を利用し、奄美パーク・大島紬美術館を見学しました。奄美パーク内にある田中一村記念美術館は、奄美大島の海をイメージした池の上に、高倉のような展示室が配置されていて、独特の設計になっています。展示されている絵画のダイナミックなタッチや色使いと相まって、この土地の雰囲気が強く印象づけられ、旅の始まりにふさわしい建物見学となりました。

喜界土地改良区地下ダムトンネル

喜界島の環境を保全しつつ基幹産業の農業を発達させる目的で建設された地下ダムトンネルは、想像以上の施設でした。見学前の説明では、喜界島は珊瑚でできており水はけが良いので、そのままだと雨水が海に流れてし

まいます。トンネルの下に止水壁を作って地下ダムを作ること、山を切り崩すことなく農業用水を確保しているとのことでした。階段で地下深くまで降り、降りきった先に長く続く1本の大きなトンネルは圧巻で、島の南北をつなぎます。広大なサトウキビ畑も、巨大なガジュマルの木も、透き通る海もこの施設により古来の美しさを保っています。

黒糖焼酎の酒造

この島で、なくてはならないものと言っても過言でない黒糖焼酎の酒造見学は今回の楽しみの一つでした。原酒を貯蔵する巨大なタンクが海辺に設置されており、科学的根拠はないけれど「波の音が熟成を促している」という素敵な話を聞き、原酒を楽しみました。

懇親会

懇親会は秋山代表幹事のご友人・ご親戚協力のもと、美しいスギラビーチ貸し切りで、プロの民謡歌手による生バンド、名物のヤギ料理、お酒はもちろん黒糖焼酎。たくさん笑い、たくさん話し、会の終わりごろには輪になって踊り、喜界島の夜を楽しみました。

「懇親会」として設定されていた時間だけでなく、この2泊3日間がずっと懇親会のように感じていたのは私だけでしょうか。集まった方々が、寝食をともにし、学び、遊び、助け合い、親交を深めていくこのような会は、なかなか実現が難しくなってきた現代です。今回が初参加でしたが、学びも多く、暖かく迎え入れていただき、本当に参加して良かったです。



上：見学前の説明会の様子
右：喜界土地改良区地下ダムトンネル



奄美パークにて

交流委員会 Gグループ

なぜ今BIMやDXが必要なのか

—BIMと建築の未来を考える—



交流委員会
Gグループ
グラフィソフトジャパン
中村 駿

2025年2月28日に開催した「Gグループ BIM勉強会」では、建築業界の現状や課題に立脚しながら、なぜ今BIMやDXが必要なのか、そしてそれをどのように現場に落とし込んでいけるのかを、私自身の経験も交えながらお話ししました。この記事では、当日の内容を改めて振り返り、勉強会で伝えたかったことを少し補足したいと思います。

なぜ「今」BIMなのか

日本の建設業界は、少子高齢化、労働力不足、低生産性といった構造的な問題に直面しています。これらは決して遠い未来の話ではなく、すでに日々の設計・施工業務に大きな影響を与えています。特に情報共有や設計変更のプロセスで感じる非効率さは、読者の多くにとって共通の悩みではないでしょうか。

そこで浮上するのが、BIMやDXといったキーワードです。これらは単なる「最新技術の導入」ではなく、建築業の在り方そのものを見直す試みであり、働き方やプロジェクトの進め方、成果物の質にまで波及するものです。

BIMはツールか、働き方か

BIMを「導入したからDX化」とは言えません。むしろ、BIMはきっかけであり、導入後にいかに業務や社内体制を変えていけるかが鍵になります。実際、勉強会では複数の設計事務所や施工会社の導入事例をご紹介しましたが、うまくいったところには共通点があります。それは、「技術だけに頼らず、運用体制や社内教育にも丁寧に取り組んでいる」ことです。

一方で、BIM導入には課題もあります。初期学習の負担、社内での理解促進、既存業務との並行運用……。だからこそ、段階的かつ現実的に進めることが重要です。

私たちが目指すのは「現場で使えるBIM」

勉強会では、最新BIMソフト「Archicad 28」の機能や、確認申請に対応した新ツール「敷地マネージャー」もご紹介しました。これは、現場目線から見ても非常に意義のある機能です。敷地条件や建築面積の自動計算、関連図面の自動生成など、日々の実務に直結する部分を効率

化するものです。

ただし、こうした機能も「使いこなせるかどうか」は別問題です。便利なツールを前にしても、まずは「どんな業務で活用するか」「どこまで業務フローに組み込むか」を明確にすることが必要です。ツールありきではなく、業務起点の発想が欠かせません。



BIMビューアーアプリ
関係者間の情報伝達が
スムーズに

BIMと建築の未来

今後、建築の現場では「図面を描くだけ」では済まない時代になっていくでしょう。BIMによる情報の一元管理は、設計だけでなく、施工、維持管理、そして発注者との対話にも関わってきます。視覚化された情報は、専門外の方との認識ギャップを埋め、プロジェクト全体をスムーズに進める力となります。

一方で、すべてをBIMに置き換える必要はないとも考えています。手描きの良さや、アナログ的な感性も建築には不可欠です。そのバランスを見極めながら、BIMをうまく「使いこなす」姿勢が求められているのだと思います。

BIMは「やるべきかどうか」を問う段階は過ぎ、「どう取り入れるか」を考えるフェーズに入っています。本勉強会が、皆様にとって自社の取り組みを見直すきっかけとなれば幸いです。



勉強会の様子

建築への視野を広げる学び

チヨダウーテ石膏ボード工場見学記

2025年2月26日、チヨダウーテ株式会社の工場を見学させていただきました。普段、壁や天井の内装材などに隠れて目にすることのない石膏ボードが私たちの生活空間をいかに支えているのか。その特徴と製造現場を、座学と工場見学を通して深く理解することができました。

講義では、あらゆる建物に不可欠な石膏ボードの役割と、耐火・遮音・断熱性といった多様な機能について理解を深めました。普段意識せずとも、安全で快適な暮らしを支える重要な建材であることを改めて認識しました。

工場見学では、巨大な石膏ボードがダイナミックに製造されていく様子を

目の当たりにし、その迫力ある音とスケールに圧倒されるとともに、製造ラインで働く方々の真剣な眼差しや丁寧な説明から、ものづくりへの熱意を感じました。実際に現場に行き、そこで働く方々と直接話す機会は、大学では得られない貴重な経験となりました。

今回の工場見学は、学生にとって視野を広げ、企業の皆様と直接交流できる有意義な機会となりました。これを機に、JIAらしい企画として今後も継続できるよう、企業の皆様にご協力をお願いしたいと思います。交流委員会の皆様、工場見学やディスプレイ展示など、ぜひ私たちに見学・訪問の機会をいただけたら大変嬉しいです！



学生の会 @joint 顧問
日本大学修士2年
伊藤綾香



見学着に着替えて集合写真



石膏で白くなったコンクリート地面を歩く

SDGsとは、建築家とは

学生の会@joint主催、第2回「相席スタジオ」



学生の会 @joint
早稲田大学修士1年
辻本雄一朗

2月28日に建築家クラブで第2回相席スタジオを行いました。今回の相席スタジオでは、「建築家はいま何を考えているのか」というテーマのもと、六鹿正治先生にお話を伺いました。特に、SDGsや建築家のあり方について、多くの学びを得る機会となりました。

私は、SDGsに対して懐疑的でした。しばしば表面的なものとなり、掲げた者勝ちという印象を受けるからです。しかし、六鹿先生のお話を通じ、

SDGsが分野を越えた議論を可能にする共通言語として機能しうることを学びました。建築の輪郭は曖昧であり、私の研究(温熱快適性)も医療や機械など他分野の知見を駆使して成り立っています。しかし、私はこれまで論文を通してしか他分野の専門家と対話したことがありません。そのため、専門分化が進む現代において、SDGsが分野横断の軸となることには価値があると感じました。

また、六鹿先生のお話から「建築家」の在り方についても考えさせられました。私が抱く建築家像は、代々木体育館の設計に携わった丹下健三先生、坪井善勝先生、井上宇市先生のように、高度な専門性を持ちつつ互いを高め合う協働の姿です。一方、JIAを含む多様な枠組みが社会課題を前提に動いていることを知り、建築家の役割は社会構造や対話の場を築くことにもあると気付かされました。すなわち、専門性を深めると同時に、社会課題に応える姿勢も重要であると学びました。

今回の議論を通じて、建築から社会に貢献する意義を改めて認識しました。今後は、自身の専門性を社会に接続していくという視点を持って活動していきたいです。



六鹿先生を囲んでの議論の様子

広報からのお知らせ

編集長 退任の挨拶

2度目の肩の荷を下ろして

2024年度『Bulletin』編集長
関本竜太



2021年度に続き、自身2度目となる『Bulletin』編集長を務めさせていただきました。それもこれでようやくその肩の荷を下ろし、また3期を務めさせていただいた支部広報委員会もこれで退任となります。今年度はまだ副編集長という肩書きだけは残りますので、引き続きワーキングメンバーとして小倉新編集長をお支えし、陰ながら『Bulletin』編集に貢献できたらと考えています。

『Bulletin』で一番好きな連載は「他人の流儀」でした。これは手弁当の広報委員にとっては役得のコーナーで、こういうことがなければ会えないようなトップランナーの方々にコンタクトを取り、誌面に載らないようなオフレコ話を含めてお聞きする機会というのは、毎日が夢のような楽しい取材時間であったことを思い出します。

人選を絞り出し、記事に穴を開けないように目配りするのは毎日が緊張感の連続なのですが、最後に執筆者によるバラエティにあふれた見出しが並ぶと、この会報誌が個性派揃いのJIAという団体そのもののようにも思えてきます。

小倉さん、この1年思うようにやり遂げて下さい！1年間誌面を支えてくださいました南風舎の八木さん、そして広報委員会の皆様にも心より御礼申し上げます。
(リオタデザイン)

編集長 新任の挨拶

多様性の風を引き込んで

2025年度『Bulletin』編集長
小倉直幸



今年度の『Bulletin』編集長を務めます構造設計家の小倉直幸と申します。建築家という職に座していない私ですが、約10年前にJIAに加入したきっかけは個人的にデザインコンペに参加したいという意図からで、それを終えたら退会しようと思っていたところがさまざまな縁で今日まで関わらせていただいています。業務においては建築という総合芸術の中で主旋律というより伴奏をするような立ち位置ですが、機械的な伴奏屋にならず生きた伴奏をしたいと思えるのは、JIAでさまざまな活動の息吹を日々感じられているからかもしれません。そう気づかせてくれた編集WGのタクトに触れられるのは興奮しつつも身の引き締まる思いです。

では、お待ちかねの特集についてですが、目を見張る建築の裏にどんなバックグラウンドの環境があり、どんな専門家がいてのか。そしてそれをいかにコンダクトしている建築家がいるのかについて、建築と建築家のその周辺にズームアウトしてみたいと思っています。テーマタイトルは「建築のその周辺」としました。今年は当支部の千葉にてJIA建築家大会が開催される年でもあり、テーマ特集としての誌面は多少減少しますが、むしろ大会の多様なテーマ性とも相乗して彩に溢れる情報をご提供できればと思います。1年間どうぞ宜しくお願いいたします。

(Atled 構造設計)

支部総務委員会からのお知らせ

支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は、2025年度以降「メール等の電磁的方法」で行います

2024年度は電磁的方法の実施に向けた事前意思確認を行い、2025年度以降は支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は「メール等の電磁的方法」に移行していきます。ご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、会員の皆様に電子メールが確実に届くよう、電子メールアドレスの変更は必ず事務局までご連絡いただきますようご協力をお願いいたします。

編集を終えて&夏を過ごす術

- 暑い夏こそ、熱い温泉に入る…別府で身につけました。汗をかかなくなります。(渡辺)
- 夏の醍醐味はなんといっても、灼熱の外をよそにエアコンの効いた部屋の中でだらしく過ごすこと！最高の贅沢です。(関本)
- 暑いあつい、とテニスコートでボールを追いかけ、シャワーした後のビールは至福のひとつです！(永峰)
- この頃になると思い出す、小学4年の夏にスイカ八切で腹痛に泣いた記憶。今は塩タブレットと風で涼を取る大人になりました。(井原)
- 暑い夏こそサウナの季節、最低でも3クールでたっぷり汗をかいた後はキンキンに冷えたビールを流し込む！これ最高！！(知見)
- 夏は講師をしている一級設計製図試験の講座が佳境。暑い日々はあつという間。その前後に旅をして羽を伸ばすのが毎年の恒例です。(大塚)
- 交流委員会の奄美大島&喜界島を巡る旅のレポート。訪れてみたくなりました。(竹内)

編集後記

- 古いビルの最上階に事務所があるので、夏の週末は室温を29℃でエアコンをつけっぱなしにして、PCサーバーを守ります！(小山)
- 夏バテする猫が暑いと言って土間タイル床に寝そべってる姿を見ると、設計が正しかったとガッツポーズします。(中澤)
- 外出すると日陰が有難いと感じます。昨年イタリアの旧市街地にて、長い歩廊が各所に見られることに感動しました。(佐久間)
- 暑い時期になってしまいましたが、海の万博に行ってきます！抽選はイタリア館狙いが、お目当てはバーレーン館；(小倉)
- 夏の外歩きには遮熱日傘があるとずいぶん楽だな、と最近発見。でも現場では日傘はちょっと邪魔なのだ。(田口)
- 涼やかな風が吹き抜ける緑豊かな溪流で釣りを楽しむと、夏の暑さを忘れてリフレッシュできます。(杉本)

今年度より『Bulletin』は発行回数が年3回になりました。今後はメールマガジンも活用して情報を配信してまいります。

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 田口知子
副委員長 : 永峰麻衣子
委員 : 竹内祐一・佐久間達也・小倉直幸・小山西光・大塚浩子・磯野智由・渡辺猛・杉本憲治・井原正揮
編集長 : 小倉直幸
副編集長 : 渡辺猛・関本竜太
編集ワーキングメンバー : 広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・関本竜太・野村月咲・伊藤綾香・知見徹摩
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 304 2025 夏号
発行日 : 令和7年7月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 ココロポ
■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <https://www.jia.or.jp/>
・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円＋税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2025

南青山から、新しいラグジュアリーを。



オーダーメイドキッチンブランド MEISDEL の新ショールーム

MEISDEL Kitchen Gallery

7.3Thu. Open

掲載写真のキッチンの質感や手触り、使い心地などを直接お確かめいただけます。

〒107-0062 東京都港区南青山 1-15-41 VORT 南青山Ⅱ 1 階
TEL 03-6271-5020
営業時間 10:00～17:00【完全予約制】
休館日 年末年始、特定日
アクセス 青山一丁目駅徒歩 4 分、乃木坂駅徒歩 5 分



空間デザイン：AUTM

MEISDEL

